

牟 礼 越 遺 跡

—大野郡三重町所在の旧石器・縄文時代遺跡—

1 9 9 5

別府大学付属博物館

目 次

はじめに	1
1. 遺跡の立地環境	2
2. 調査の経緯	3
3. 調査区の設定	3
4. 基本層序と遺物包含層	4
5. 出土遺物の観察	6
6. 表面採集の遺物	26
7. VI層出土の礫群	30
8. ま と め	30
おわりに	36

挿 図 目 次

第1図 牟礼越遺跡と周辺の旧石器時代遺跡	1
第2図 牟礼越遺跡周辺地形図	2
第3図 牟礼越遺跡グリッド配置図	4
第4図 大野川中流域(左)・牟礼越遺跡基本土層柱状模式図	5
第5図 Aグリッド遺物平面垂直分布図	6
第6図 Aグリッド西壁土層断面実測図	7
第7図 Aグリッド出土遺物実測図・拓影	7
第8図 Bグリッド遺物平面垂直分布図	8
第9図 Bグリッド南壁土層断面実測図	8
第10図 Bグリッド出土遺物実測図・拓影	9
第11図 Dグリッド遺物平面垂直分布図	10
第12図 Dグリッド東壁土層断面実測図	11
第13図 Dグリッド出土遺物実測図・拓影	11
第14図 Eグリッド遺物平面垂直分布図	12
第15図 Eグリッド北東壁土層断面実測図	13
第16図 Eグリッド出土遺物拓影	13

第17図	Fグリッド遺物平面垂直分布図	14
第18図	Fグリッド出土遺物実測図	15
第19図	Gグリッド遺物平面垂直分布図	15
第20図	Gグリッド南西壁土層断面実測図	16
第21図	Gグリッド北西壁土層断面実測図	16
第22図	Gグリッド出土遺物実測図	16
第23図	Hグリッド遺物平面垂直分布図	17
第24図	Hグリッド東壁土層断面実測図	18
第25図	Hグリッド出土遺物実測図	18
第26図	第1調査区（Fグリッドを含む）遺物平面垂直分布図	19・20
第27図	第1調査区東壁土層断面実測図	21
第28図	第1調査区南壁土層断面実測図	23
第29図	第1調査区出土遺物実測図	23
第30図	第1調査区出土遺物実測図	24
第31図	第1調査区出土遺物実測図	25
第32図	第1調査区出土遺物・拓影	26
第33図	第1調査区VI層礫群・遺物平面垂直分布図	27・28
第34図	牟礼越遺跡周辺表面採集資料実測図・拓影	29

写真目次

I	牟礼越遺跡遠景（南東より）	牟礼越遺跡近景	37
II	第1調査区南壁土層堆積	牟礼越遺跡崖面の土層堆積	38
III	第1調査区VI層出土の礫群	第1調査区VI層出土の礫群と剝片	39
IV	第1調査区・他の出土石器		40
V	第1調査区出土の細石核	第1調査区出土の斧形石器	41
	Dグリッド出土の敲石		41
VI	Hグリッド・第1調査区VI層出土の石器		
		表面採集の石器	42
VII	押型文土器	無文土器	43
VIII	表面採集の剝片尖頭器	発掘調査参加学生	44

はじめに

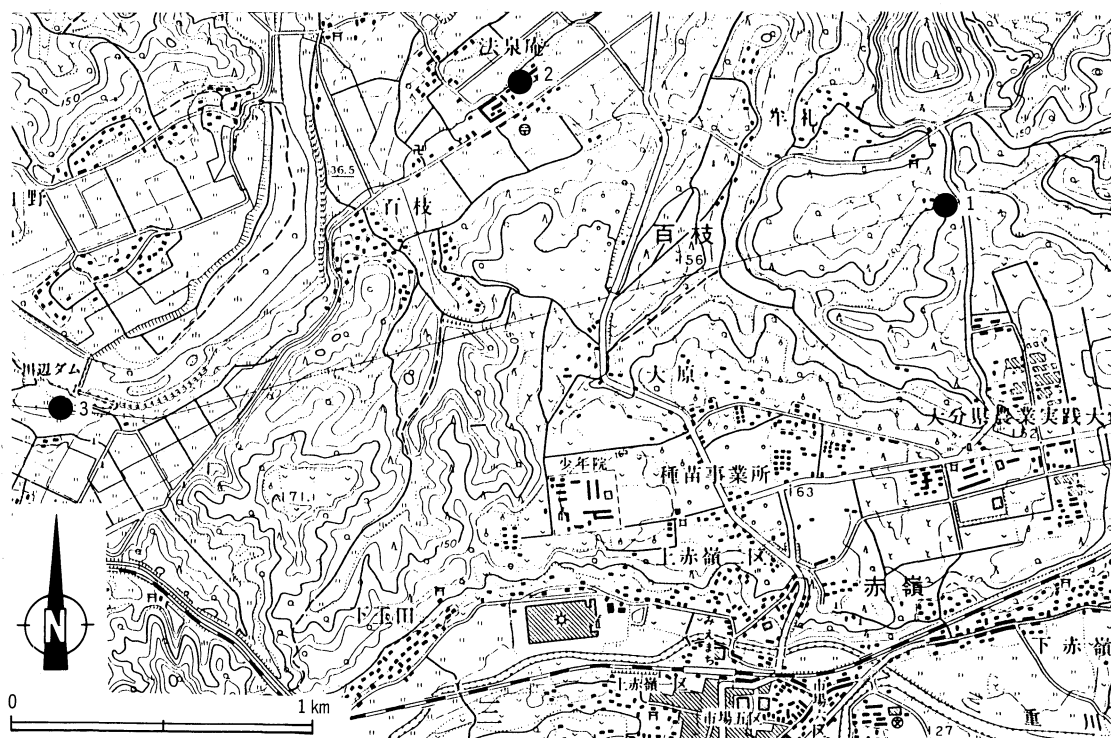
大野川中流域は、良好な火山灰台地や川岸段丘が発達しており、岩戸遺跡・百枝遺跡・上下田遺跡などをはじめとする、多くの遺跡で旧石器時代の人類遺物が確認されており、旧石器時代の遺跡が密集する地域として重視されている。

別府大学付属博物館では、「大野川流域における先史時代の調査研究」をテーマとして、分布調査・試掘調査・本発掘調査などの活動を継続的に行っている。

牟礼越遺跡の調査は、この一環として行われたものであり、これまで3回の試掘調査を実施してきた。第1次調査が1993年8月30日から9月6日までの8日間、第2次調査が1994年3月28日から3月31日までの4日間、さらに第3次調査が1994年8月26日から9月2日までの8日間で、試掘調査の延べ日数は20日間である。

なお、第1次試掘調査の概要については、「別府大学付属博物館だより」No.40(1993年12月)に速報として報告している。

今回の報告書は第1次から第3次調査までの結果をまとめたものである。



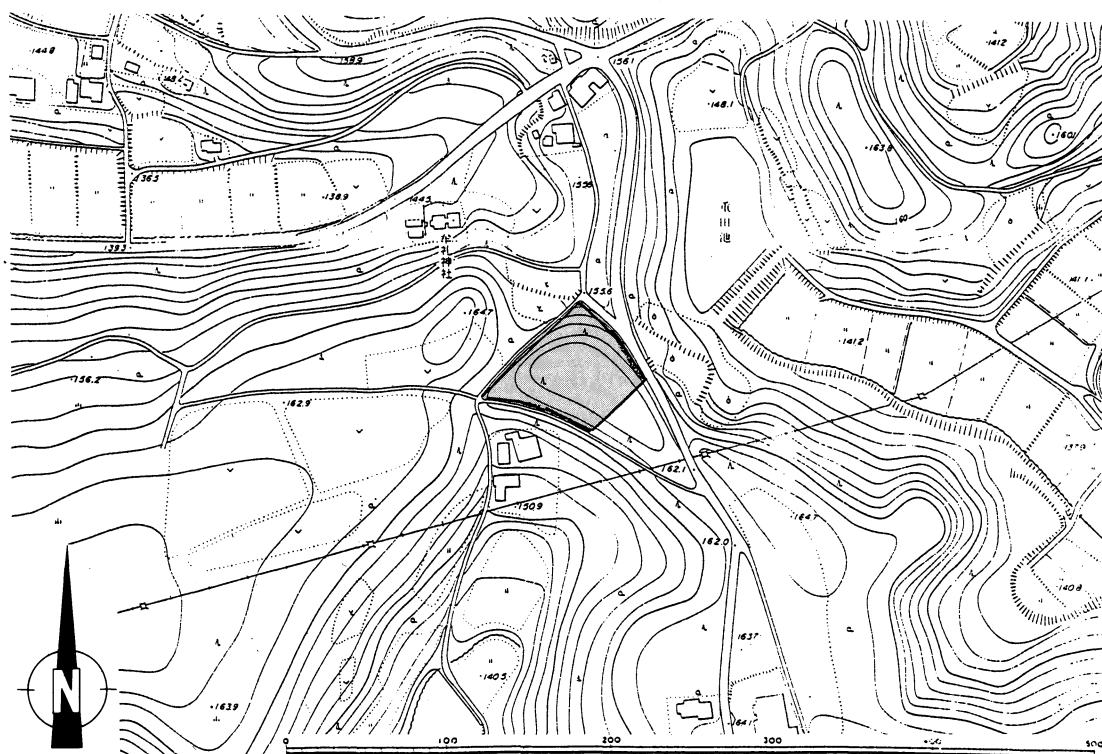
第1図 牟礼越遺跡と周辺の旧石器時代遺跡

1 牟礼越遺跡 2 百枝遺跡 3 上下田遺跡

1 遺跡の立地環境

阿蘇の外輪山の東側および祖母・傾山系の北麓に水源を発する大野川は、各所で小河川を併呑しつつ大分県のほぼ中央を東流して別府湾に注いでいる県下最大の河川である。この大野川上・中流域一帯には、阿蘇山や九重山などの火山を起源とする降下堆積物（テフラ）が幾層にも厚く堆積している。特に阿蘇溶結凝灰岩（Aso-4）は、大野川の浸食作用による複雑な河岸段丘や舌状台地を形成している。これらの段丘・台地上には先史時代の遺跡が数多く存在し、特に旧石器時代の遺跡はこれまで約100ヵ所以上が報告されており、大分県下の同時代の遺跡の約60%を占めている。

牟礼越遺跡は標高170mの狭小な台地上に立地し、西側約2.2kmには大野川が、北側約1.6kmには三重川が流れている。周辺の旧石器時代の代表的な遺跡としては、当遺跡の谷を隔てた西側約1.5km、標高102mの段丘上にナイフ形石器文化を主体とする百枝遺跡が、さらに西へ約2.9km、標高93mの段丘上には細石刃文化の遺跡として知られている上下田遺跡が大野川に接して立地している。また当遺跡から南西側へ約4.8km、標高120mの段丘上には、ナイフ形石器文化のコ



第2図 牟礼越遺跡周辺地形図

ケシ形石製品が出土していることで注目される、国指定史跡の岩戸遺跡が立地している。大野川の対岸に目を移すと、一般に「大野原台地」と呼ばれる標高約200～300mの凝灰岩台地が広がり、この台地上には宮地前遺跡、今峠遺跡、さらに駒方遺跡群など旧石器時代の遺跡が密に分布している。

2 調査の経緯

牟礼越遺跡は、1990年頃台地の崖面の一部で土砂採取が行われた際、旧石器時代の遺物が発見され遺跡として確認された。1991年に土砂採取が再び行われるとの話が持ち上がり、三重町教育委員会は事前調査として、1992年1月下旬に試掘調査を実施した。その結果、黒色土層の下部およびローム層上部の土層から、縄文早期の土器片および旧石器時代の石器が発見された。その後事態が変わり土砂採取は中断され、しばらくの間は遺跡の破壊が免れることとなった。

1993年4月、別府大学付属博物館の調査研究活動の一環として大野川中流域の分布調査で、当地域周辺の踏査を実施した。その際、遺跡が所在する台地の切り通しの土層断面において、始良 Tn 火山灰 (AT) 上位のローム層中に拳大程の礫の包含が確認され、同時に崩れた土から剥片および敲石と推定される石器を採集した。

このことから、改めて当遺跡の調査の必要性を考え、合計3回の試掘調査を行った。第1次調査は、ローム層中の良好な包含層とその広がりを確認する目的で実施した。第2次調査では、遺跡における遺物集中部分の把握を目指し、さらに第3次調査では、第2次調査で問題となった黒色帯よりさらに下層のローム層中に包含された礫群の存在を明確にし、同時に礫群にともなう石器群の有無を確かめるために実施した。

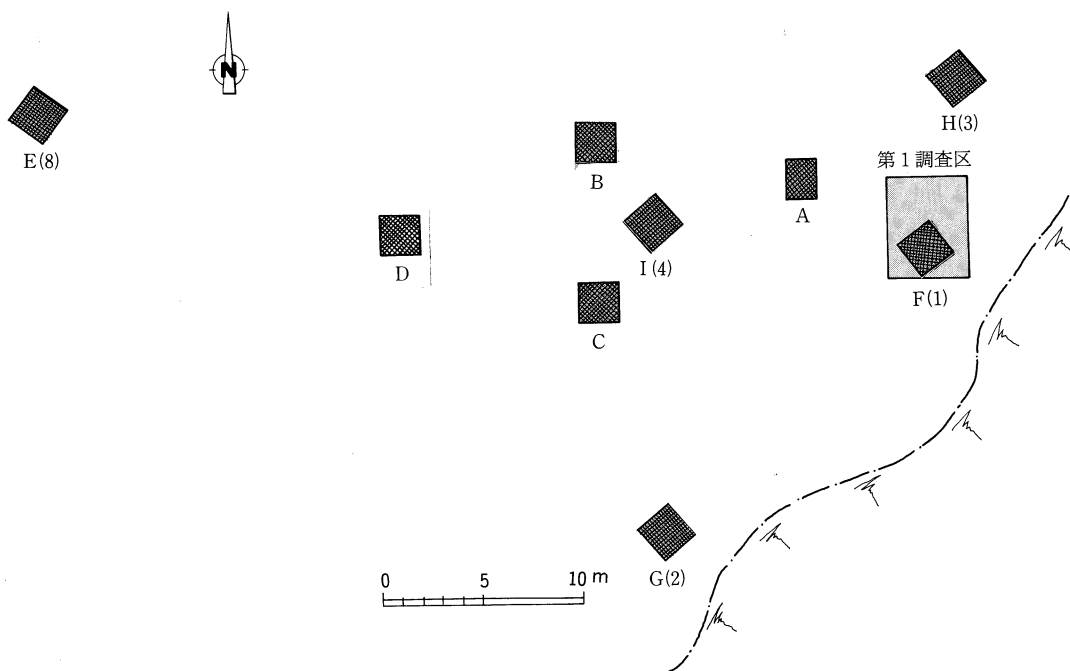
3 調査区の設定

牟礼越遺跡のあるこの台地は、約半分が土砂採取によって失われている。そのため削平が行われていない台地平坦部のほぼ中央を基準にして調査区を設定した。台地は東北部が最も高く、南北方向に傾斜しており、土層も同様である。

第1次調査は、包含層の確認およびその広がり確かめることを主眼とした。土砂採取がおこなわれていない台地平坦部のほぼ中央を基準として、東西および南北方向に2×2mの試掘グリッド(A～Dグリッド)を4ヵ所(Aグリッドのみ2×1.5m)、さらに三重町教育委員会の試掘調査において、ローム層直上で発掘を終了していた調査区(8トレンチをEグリッドとした)1ヵ所を活用して、計5ヵ所のグリッドで試掘調査を実施した。発掘総面積は19m²である。

第2次調査は、第1次調査の結果遺物が台地の東南部に集中したことから、三重町教育委員会の試掘調査においてローム層直上で発掘を終了していた調査区のうち、台地の崖面に近い4つの調査区（1トレンチをFグリッド、2トレンチをGグリッド、3トレンチをHグリッド、4トレンチをIグリッド）をそのまま活用して、計4ヵ所のグリッドで試掘調査を行った。総面積は16m²である。

第3次調査では、第2次調査のFグリッドで一部を確認した黒色帯よりさらに下層のローム層中に含まれた礫群を明確にするため、さらに周辺の石器群確認を目的にFグリッドを東西方向に4m、南北方向に5m拡張し、これを第1調査区として試掘調査を実施した。総面積は20m²である。



第3図 牟礼越遺跡グリッド配置図

4 基本層序と遺物包含層

第4図は、大野川中流域および牟礼越遺跡における基本土層の柱状模式図である。当遺跡では基本層序として6層の自然堆積を確認したが、大野川中流域の諸遺跡で一般的に見られるような、発達した堆積状況は認められなかった。

I層から縄文時代の遺物が出土している。旧石器時代の主要な包含層はII層～VI層に認められる。

第I層—黒色土層。いわゆるクロボク層である。アカホヤ層(通称 Ah) 下位に見られるクロボク層であるが、台地上部がアカホヤ層まで削平されているため、クロボク層が表土層となる。少々湿っぽいが、粒子が細かくサラサラしていて柔らかい。50~60cmの堆積を測る。この層中から若干の縄文時代早期の土器片、それに旧石器時代の所産と判断される石器類が出土しているが、本来縄文時代早期の包含層である。

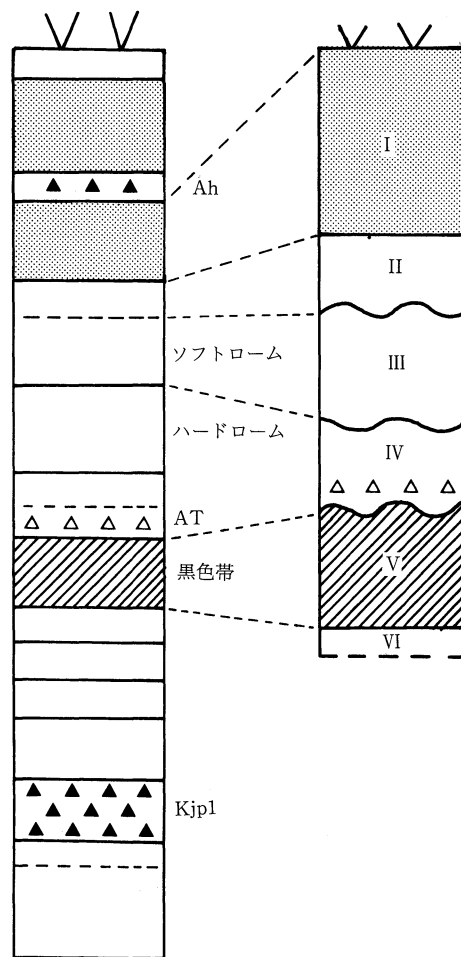
第II層—暗灰褐色土層。I層からIII層への漸移層である。I層より湿っていて粒子が細かくサラサラしていて柔らかい。10~20cmの堆積を測る。縄文時代の土器片と細石刃・細石核が出土している。

第III層—黄褐色土層。いわゆるソフトローム層である。粒子はやや粗いがサクサクとしていて柔らかく、湿っぽく粘性に富み引き締まっている。色調はやや明るい。下部は浸食のためか凹凸が激しい。約50cmの堆積を測る。ナイフ形石器や角錐状石器が出土している。

第IV層—暗黄褐色土層。いわゆるハードローム層である。III層よりも色調も暗く、硬く引き締まっていて、粘性が強く湿っている。この層中に始良 Tn 火山灰(通称 AT)層がブロック状、あるいは土壌化して粒状に点在して包まれている。30~40cmの堆積を測る。この層において斧形石器が出土している。

第V層—黒褐色土層。いわゆる黒色帯(ブラック・バンド)である。ザラザラとした感があり、粘性に富み硬く引き締まっていて湿っぽい。30~40cmの堆積を測る。

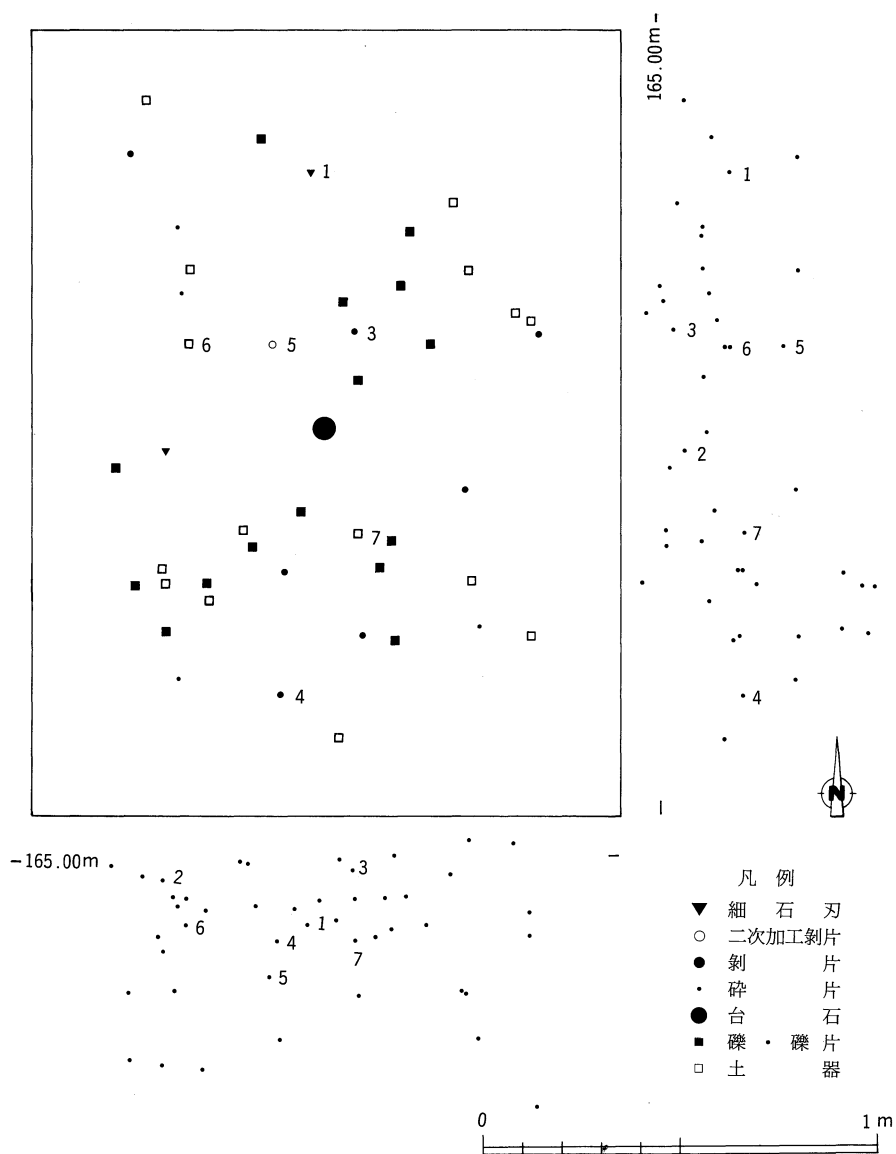
第VI層—明黄褐色土層。かなり柔らかいが、湿りけが強く粘性に富んでいる。粒子が細かくサクサクとしている。下面まで完掘していないため、堆積の厚さは不明。第3次調査において礫群とそれに伴う石器類が確認できた。



第4図 大野川中流域(左)・牟礼越遺跡基本土層柱状模式図

5 出土遺物の観察

Aグリッド

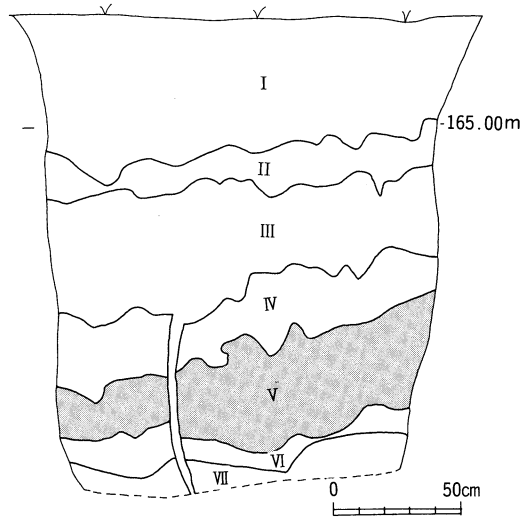


第5図 Aグリッド遺物平面垂直分布図

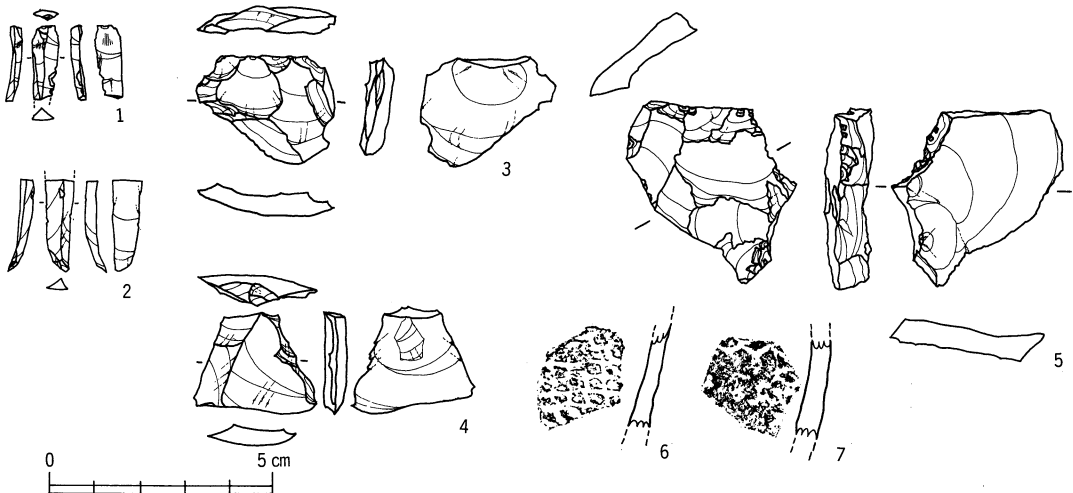
1. 単剥離打面を有する細石刃である。下端部は折断により取り除かれている。頭部調整は認められない。黒曜石製。III層出土。

2. 打面部を折断により除去された細石刃である。下端部は裏面側にやや湾曲している。流紋岩製。II層出土。
3. 単剥離打面を有する不定形な小型の剥片である。流紋岩製。II層出土。
4. 不定形な剥片である。両設打面を有する石核より剥離されたものと考えられる。末端部を欠損している。流紋岩製。III層出土。
5. 打面再生剥片と考えられる。剥片の表面(石核の打面)に打面調整を施したのち、目的剥片を剥離している。また、作業面を打面として、この剥片を剥離し、打面を再生したものと考えられる。作業面右側の剥離は、頭部調整あるいは二次加工のいずれか不明である。流紋岩製。III層出土。
6. 外面に微細な楕円押型文を横位に施し、内面に削り状の調整が認められる胴部片である。器壁は4mm程度と薄く、胎土は比較的緻密であり外面の色調は灰褐色を呈する。II層出土。
7. 微細な楕円押型文を横位に施した胴部片である。押型文の一部がナゲ消されているが、意図されたものかアクシデントによるものかは、破片が小さいため不明である。胎土および色調から、6と同一個体と思われる。II層出土。

他にII層中から無文土器の胴部片が14点出土している。

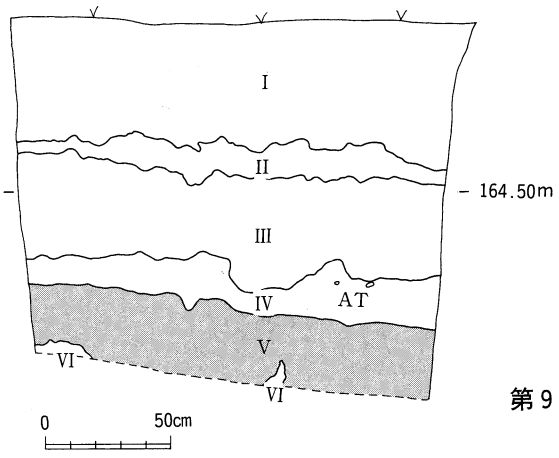
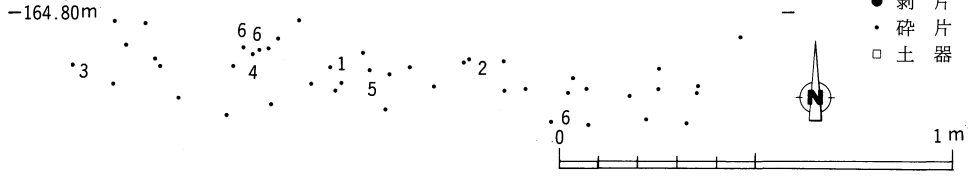
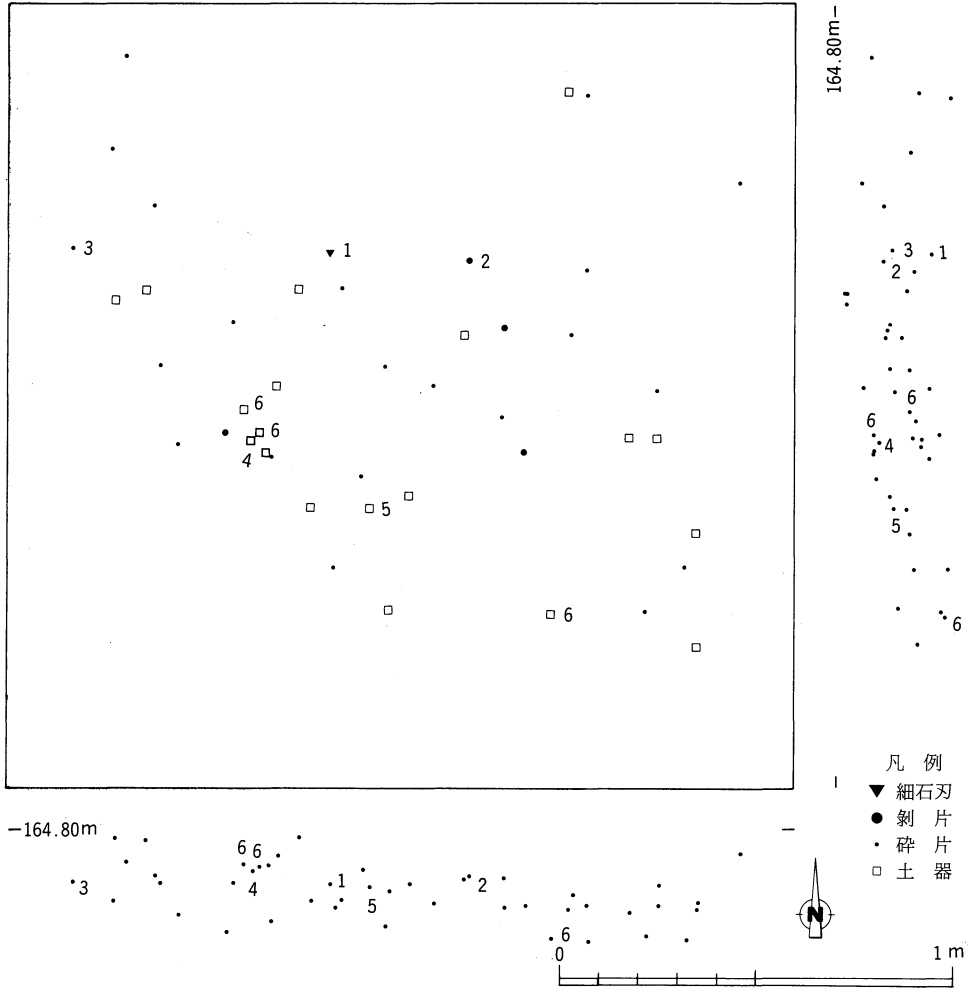


第6図 Aグリッド西壁土層断面実測図



第7図 Aグリッド出土遺物実測図・拓影

Bグリッド

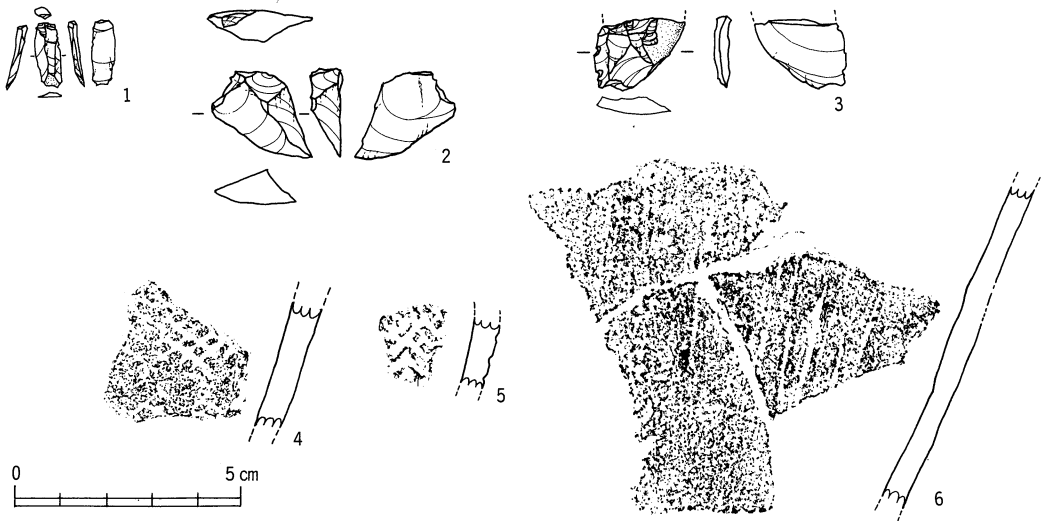


第8図 Bグリッド遺物平面
垂直分布図 (同じ番
号は同一個体)

第9図 Bグリッド南壁土層
断面実測図

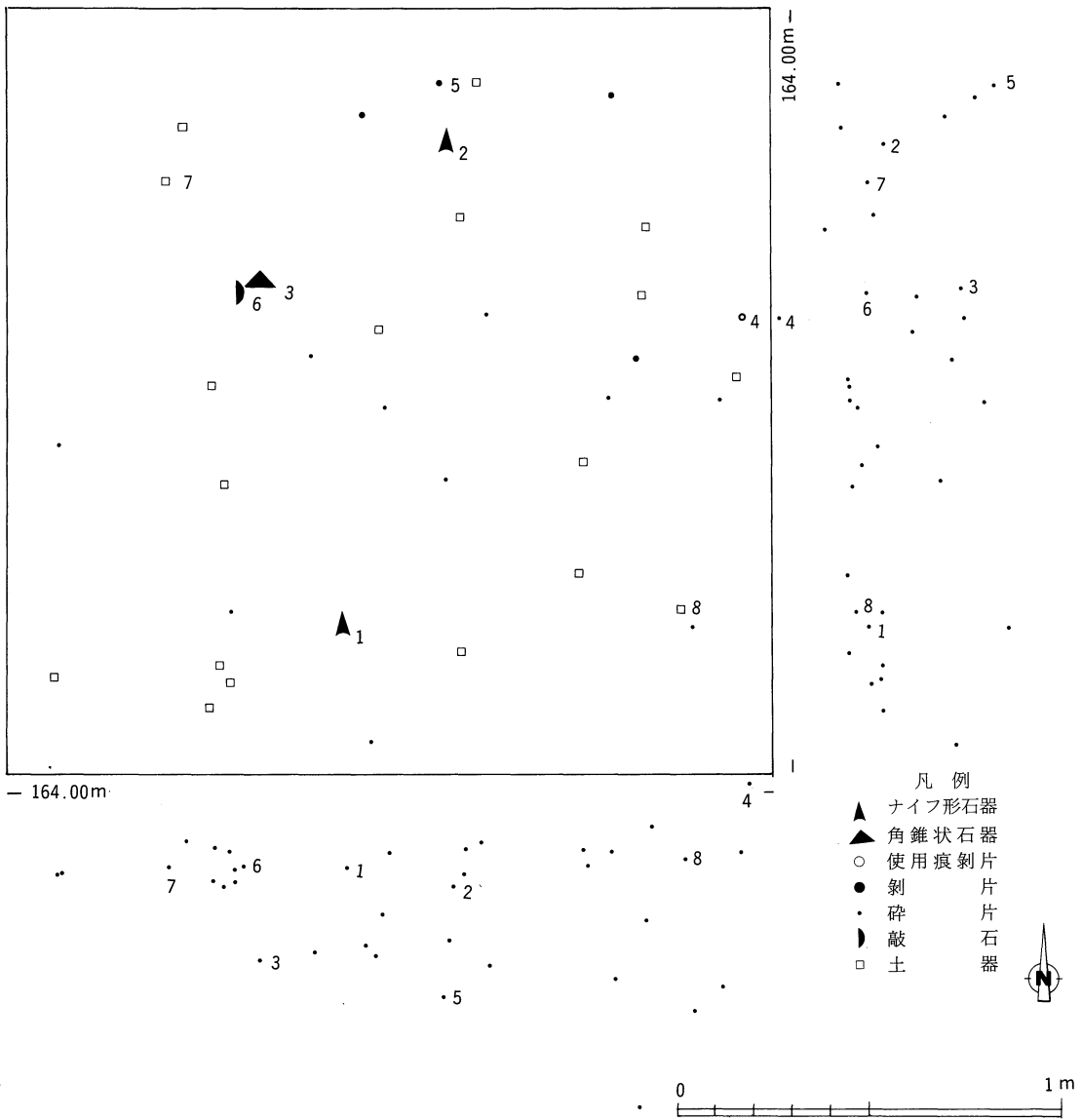
1. 単剥離打面を有する完形の細石刃で、末端部に礫面を残している。流紋岩製。II層出土。
2. 剥片の形状から、頭部調整剥片と考えられる。上端部からの剥離痕が認められる。流紋岩製。II層出土。
3. 打面転移を行っている石核から剥離された小型の剥片である。上端部は欠損している。チャート製。II層出土。
4. 比較的微細な楕円押型文を横位に浅く施文しているため、大部分がかなり不明瞭になっている。II層出土。
5. やや粗雑な山形押型文を横位に施し、器壁は比較的薄い。II層出土。
6. 尖底になると思われる深鉢形土器で、外面に条痕文を縦位に施し、内面は横方向にナデ調整を行っている。器壁は5mm程度と薄く、胎土に多量の石英粒を含み、色調は内外面とも黄褐色を呈している。II層出土。また、類似した特徴をもつ土器片が同層中から8点出土しており、全て同一個体と考えられる。

他にII層中から無文土器の胴部片が6点出土している。



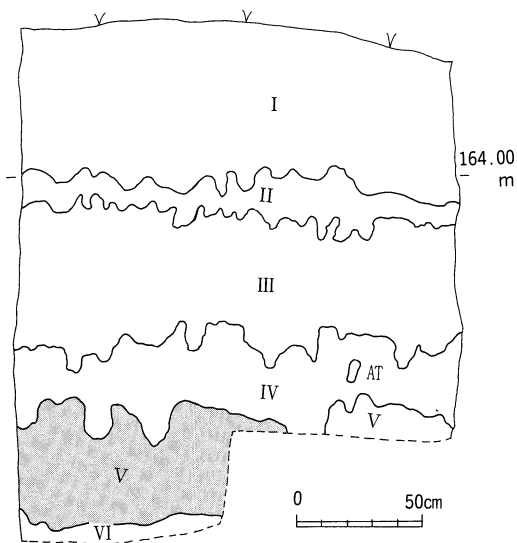
第10図 Bグリッド出土遺物実測図・拓影

Dグリッド



第11図 Dグリッド遺物平面垂直分布図

1. 一側辺加工のナイフ形石器である。表面の剝離面構成から、打面転移を行う石核から剝離された不定形な剝片を素材としていることが理解できる。刃潰し調整は、表面右側部に裏面側から打面部を除去するように施されている。流紋岩製。II層出土。
2. 不定形剝片を素材としたナイフ形石器である。表面の右側下部に裏面側から刃潰し調整を

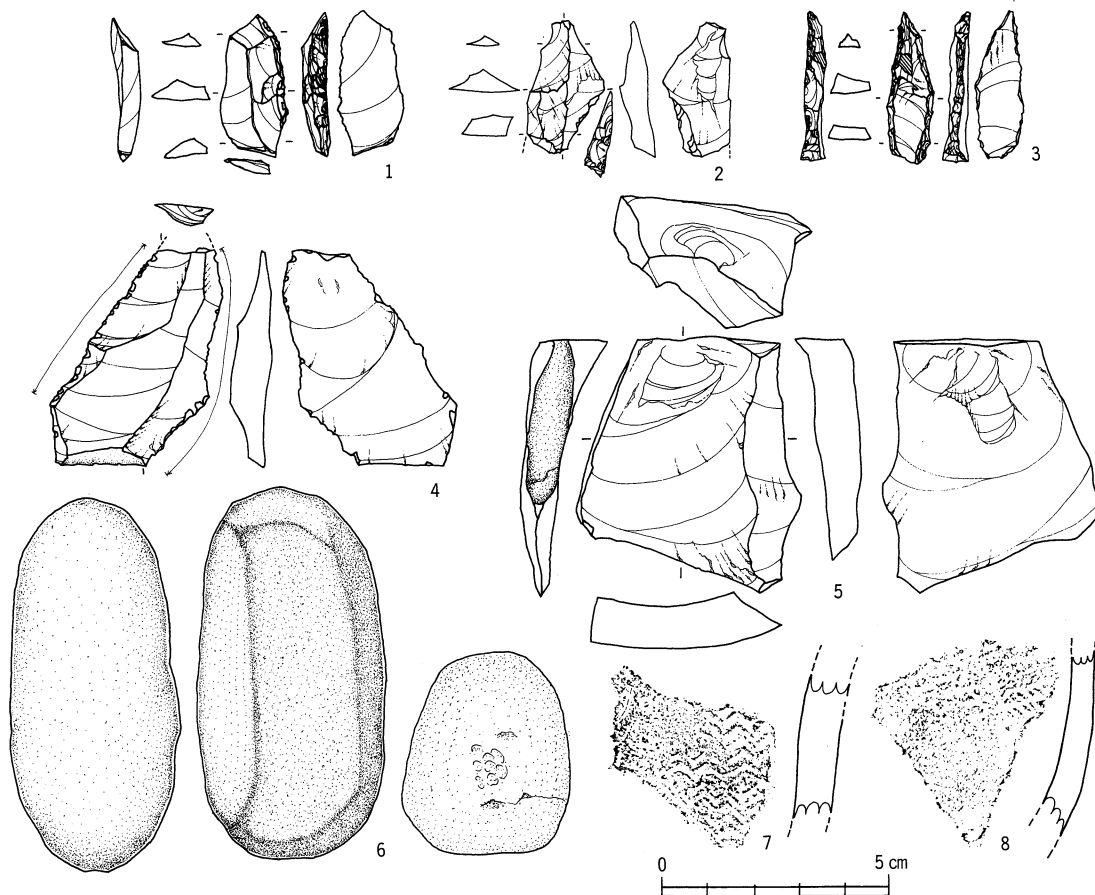


第12図 Dグリッド東壁土層断面実測図

施している。素材剥片の打面部を先端に設定している。流紋岩製。III層出土。

3. 縦長剥片を素材とした角錐状石器である。調整は裏面側から施されており、特に先端部には綿密に施されている。これにより、打面および打瘤は除去され、素材時の形状とは大きく異なっている。流紋岩製。III層出土。

4. 縦長剥片を用いた使用痕剥片である。使用痕は両側辺に刃こぼれ状に認められる。単設打面を有する石核から剥離された剥片を素材としている。打面部は欠損している。流紋岩製。III層出土。

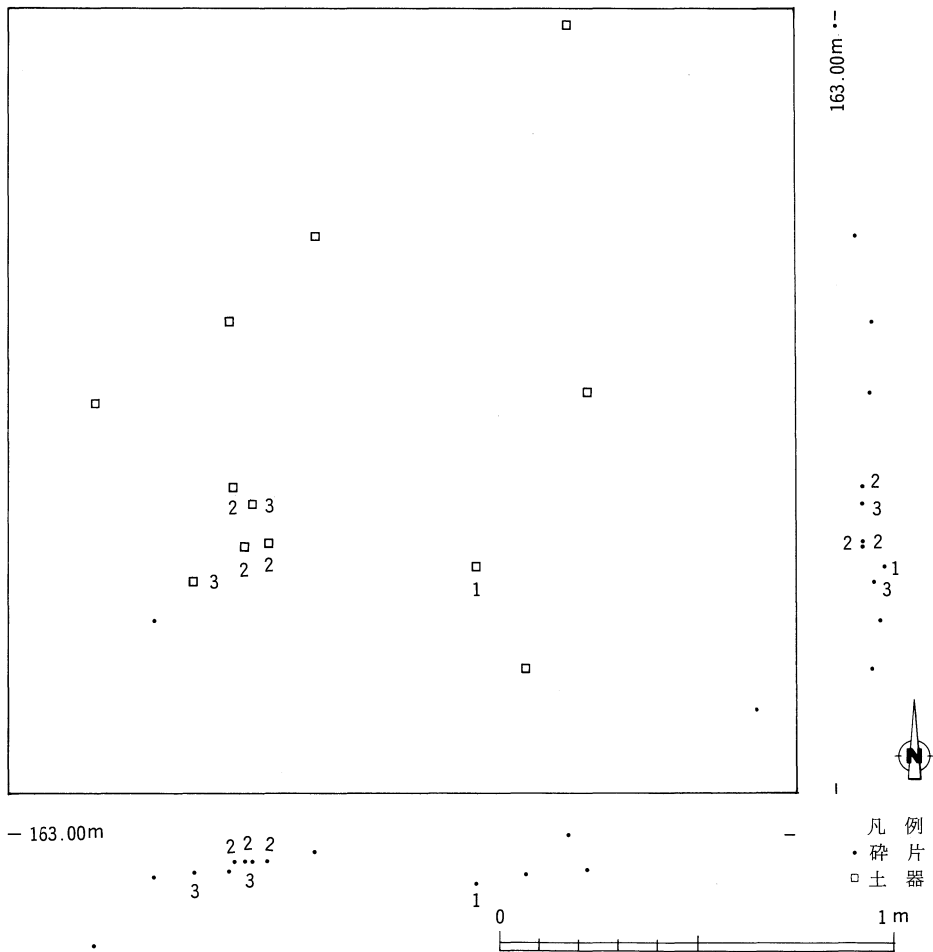


第13図 Dグリッド出土遺物実測図・拓影

5. 大型で厚みのある縦長剥片である。単設打面を有する石核から剥離されており、左側辺に礫面を残す。流紋岩製。III層出土。
6. 楕円形の礫を使用した敲石である。敲打痕は上下両端に認められる。石材は安山岩を使用している。II層出土。
7. 山形押型文を横位に浅く施した比較的器壁の厚い胴部片である。II層出土。
8. 外面に微細な楕円押型文を横位に浅く施文した胴部片である。文様の大部分がナデ消されているが、帯状施文を意識したものかは不明である。内面には削り状の調整がみられる。II層出土。

他にII層中から無文土器の胴部片が10点出土し、その多くは比較的器壁の厚いものである。

E グリッド



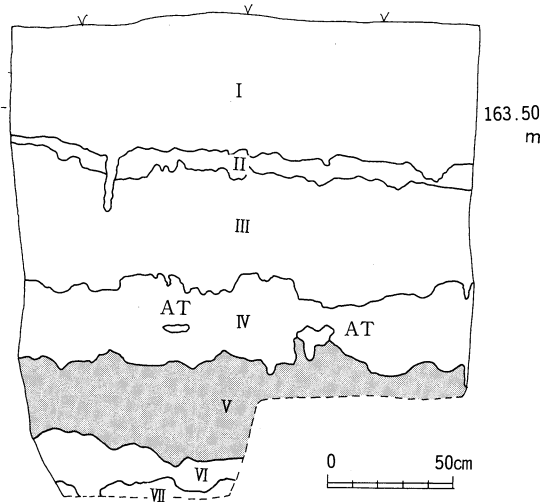
第14図 Eグリッド遺物平面垂直分布図

1. 微細な楕円押型文を横位に施した胴部片である。破片が小さいため帯状施文を意識したものは不明であるが、下部の文様はナデ消されている。II層出土。

2. 器壁の厚い無文土器の胴部片である。胎土には角閃石が比較的多く含まれており、色調は赤褐色を呈している。同グリッドからは、もう1点類似した資料が出土しており、他のグリッドからも普遍的に出土している。II層出土。

3. 無文土器の尖底部付近であり、焼成は不良である。II層出土。

他にII層中から5点の無文土器が出土し、さらにIII層中からは、6mm程度の器壁をもち焼成がやや不良な無文土器片が1点出土している。

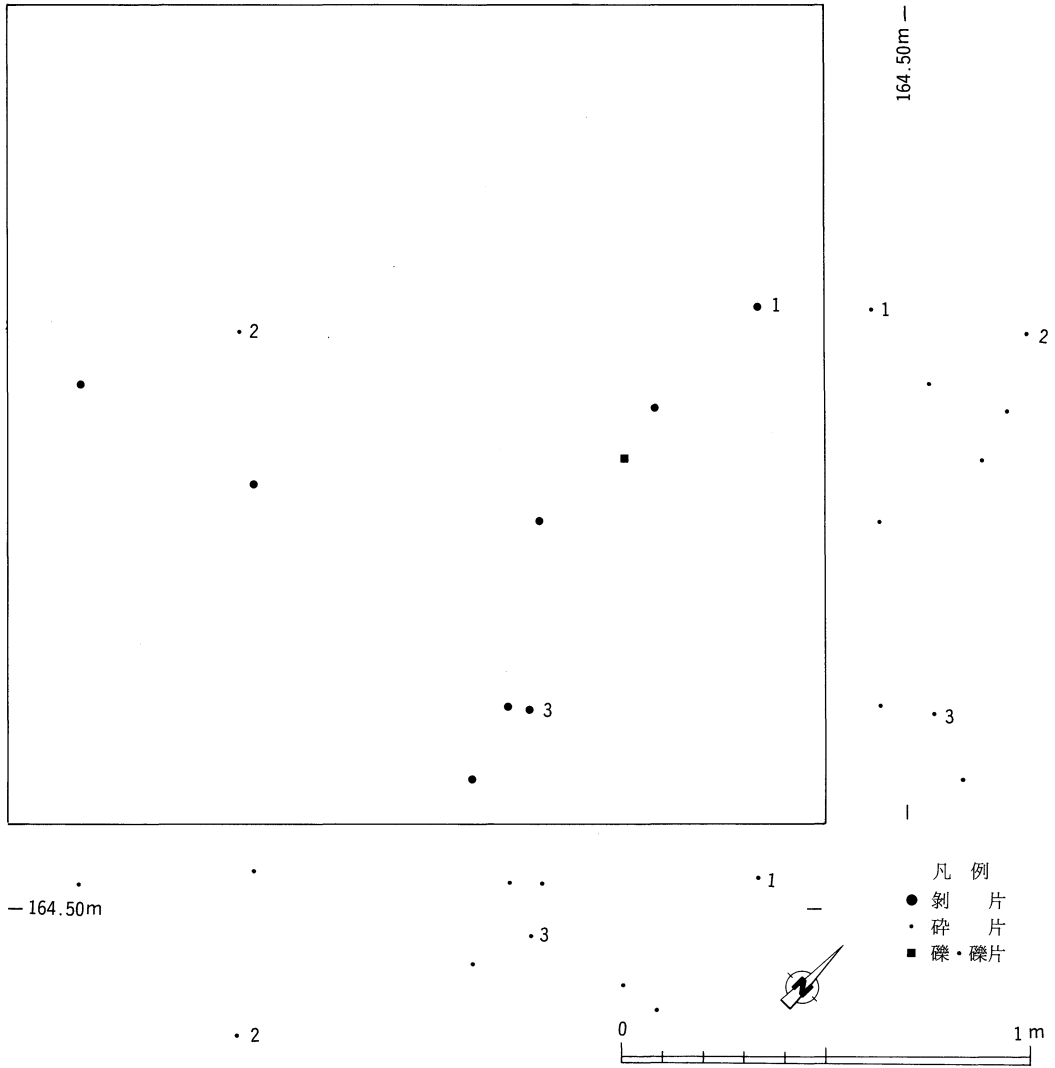


第15図 Eグリッド北東壁土層断面実測図



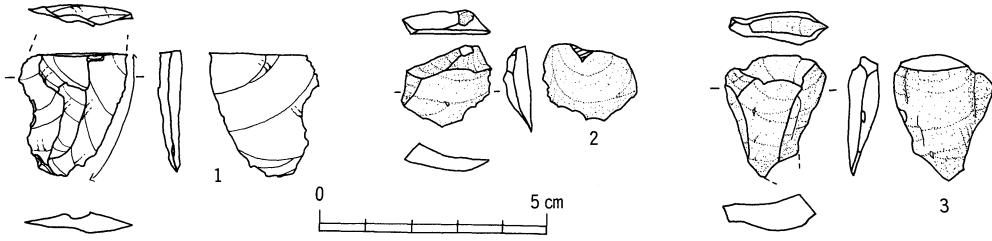
第16図 Eグリッド出土遺物拓影

Fグリッド



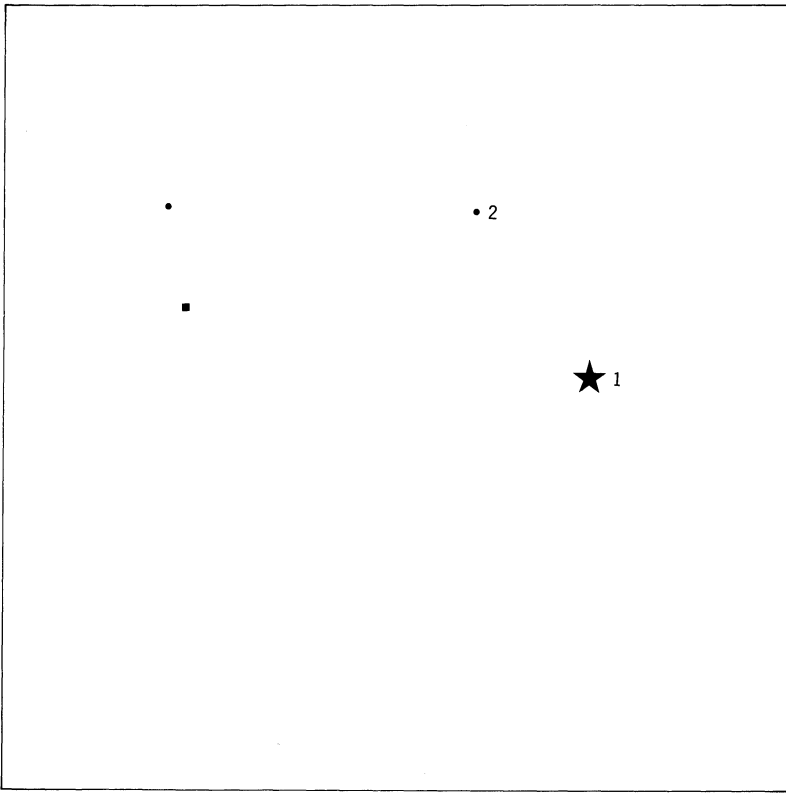
第17図 Fグリッド遺物平面垂直分布図

1. 縦長剥片を用いた使用痕剥片である。使用痕は表面の右側辺全辺に認められる。打面部を欠損している。流紋岩製。Ⅲ層出土。
2. 平坦打面を有した剥片で、風化が著しい。黒曜石製。Ⅳ層出土。
3. 平坦な打面をもつ剥片であり、全体的に風化が著しい。下端の一部を欠損している。黒曜石製。Ⅳ層出土。



第18図 Fグリッド出土遺物実測図

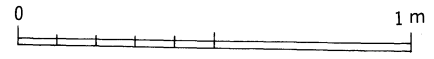
Gグリッド



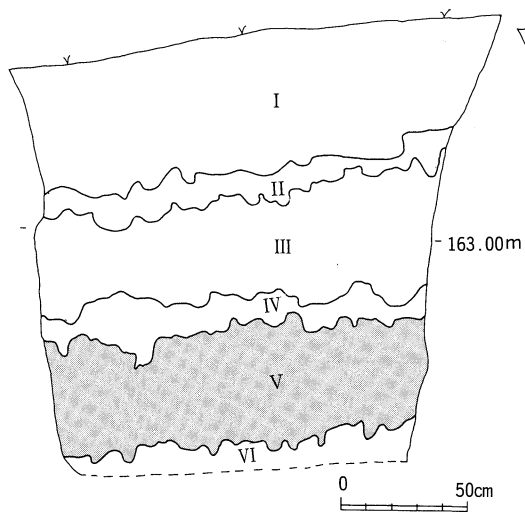
163.00m

- 163.00m

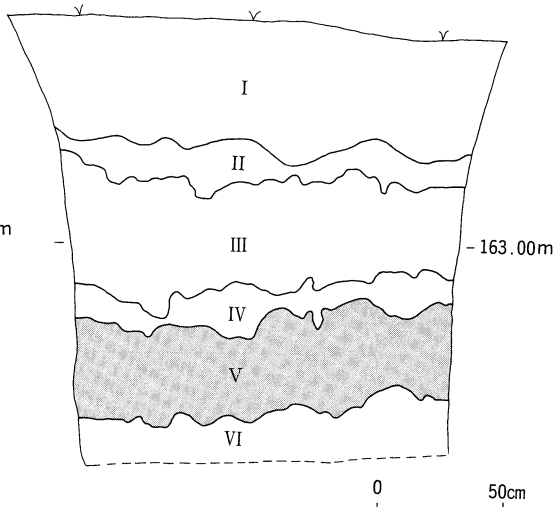
- 凡例
- 剥片
 - ★ 石核
 - 礫・礫片



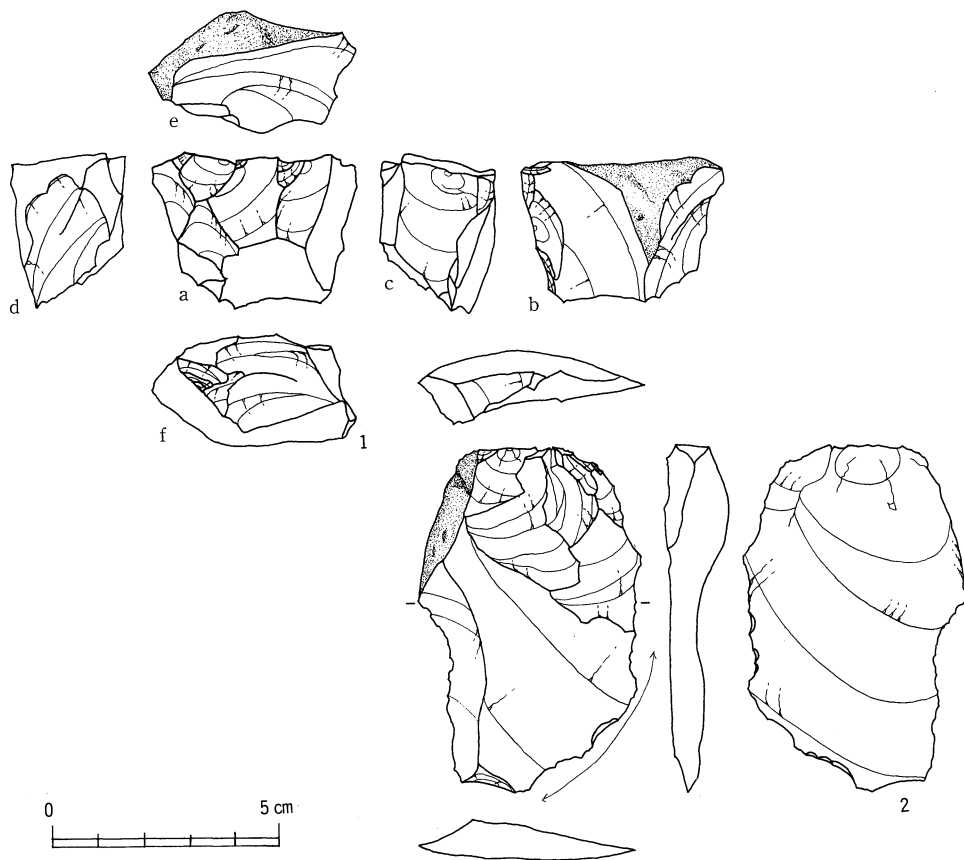
第19図 Gグリッド遺物平面垂直分布図



第20図 Gグリッド南西壁土層断面実測図



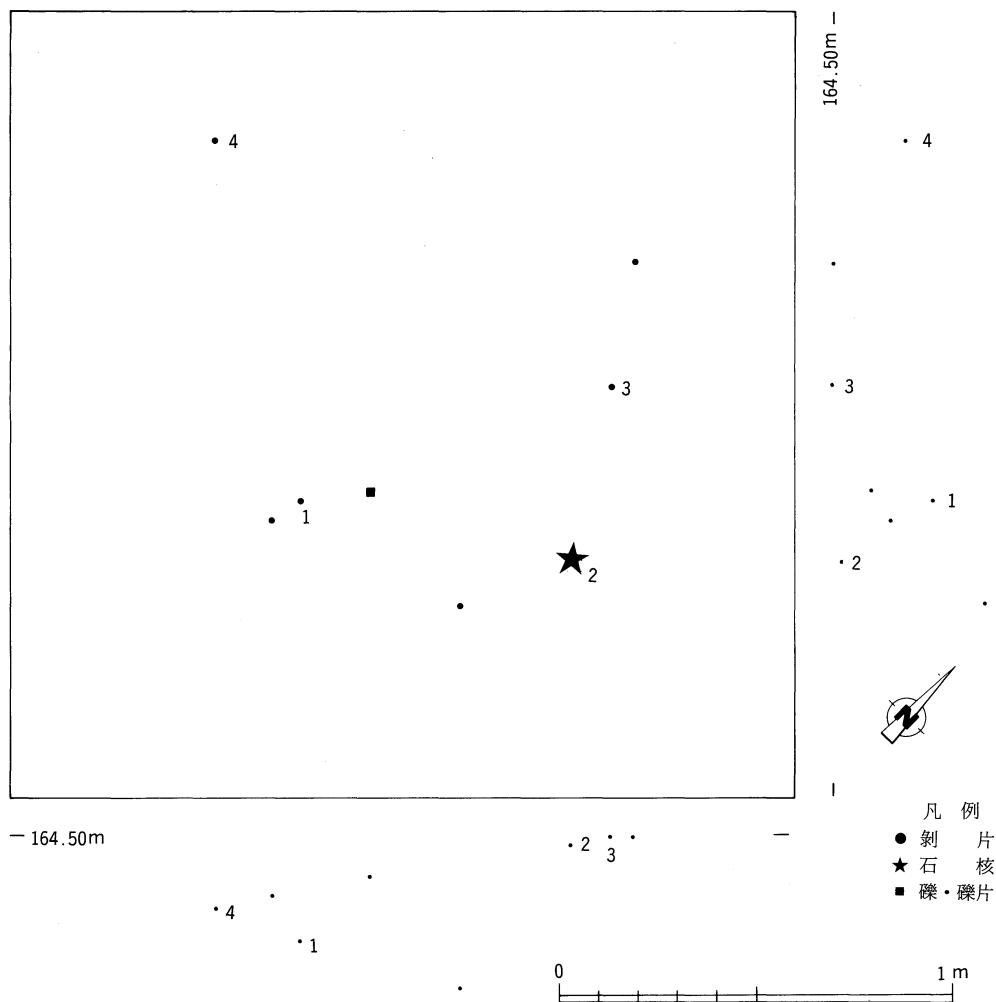
第21図 Gグリッド北西壁土層断面実測図



第22図 Gグリッド出土遺物実測図

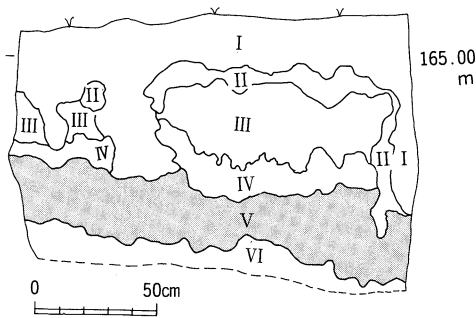
1. b面に礫面を残した石核である。a面を作業面とし、e面側から剥片を剥離している。最終的にc面で調整を施さずに剥片を剥離している。剥離された剥片は、やや寸づまりな形状である。安山岩製。Ⅲ層出土。
2. 大型の剥片を素材とした使用痕剥片である。使用痕は右側辺下端部に刃こぼれ状に認められる。打面転移を行う石核から剥離された剥片を用いており、左側辺上部に礫面を残している。流紋岩製。Ⅴ層出土。

Hグリッド



第23図 Hグリッド遺物平面垂直分布図

1. 平坦な打面を有した、やや幅広な剥片である。風化が著しい。黒曜石製。Ⅵ層出土。
2. 石核である。e面を打面として、a・b・d面と剥片剥離作業面を固定している。a



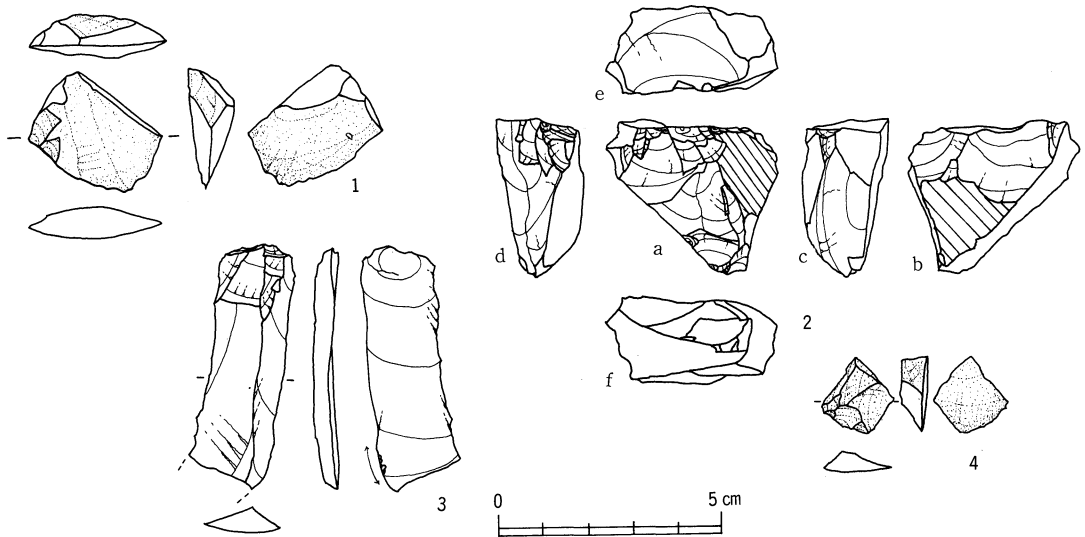
第24図 Hグリッド東壁土層断面実測図

面とb面には節理面が残っている。チャート製。

IV層出土。

3. 石刃状の縦長剥片を用いた使用痕剥片である。使用痕は裏面左側辺下端部に認められる。打面転移を行う石核から剥離された剥片で、下端部は欠損している。流紋岩製。IV層出土。

4. 小型のスクレイパーである。剥片末端部に裏面からの連続的な剥離が認められるので、刃部であると考えられるが、風化が著しい。黒曜石製。VI層出土。

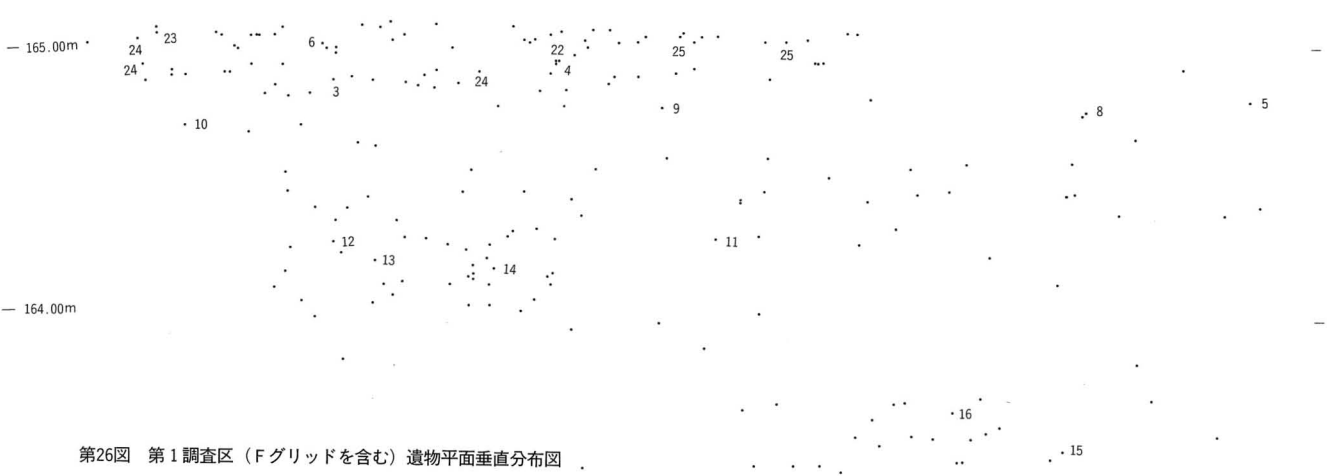
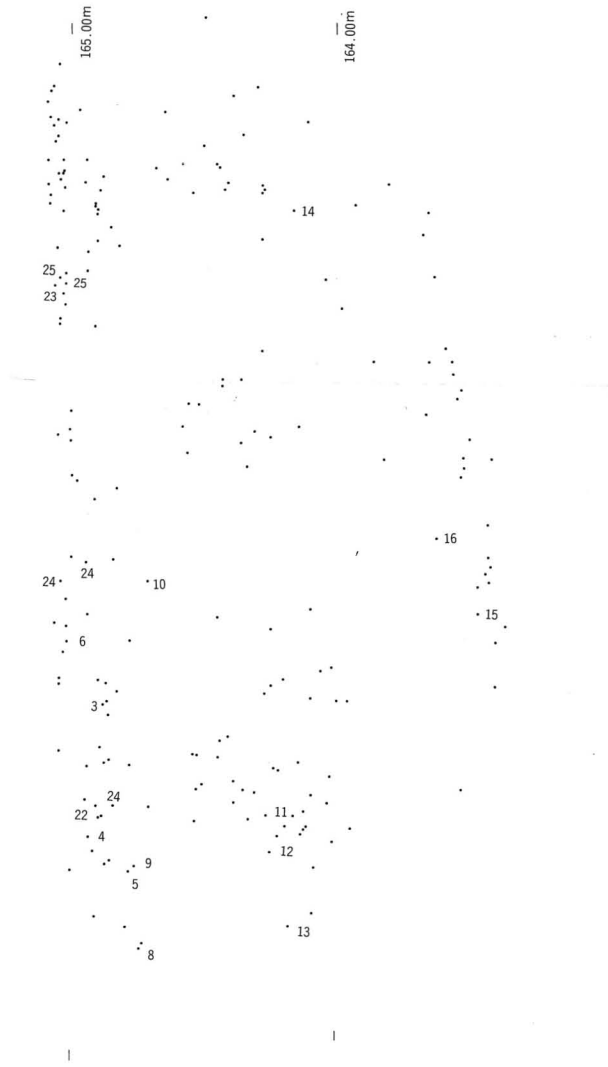
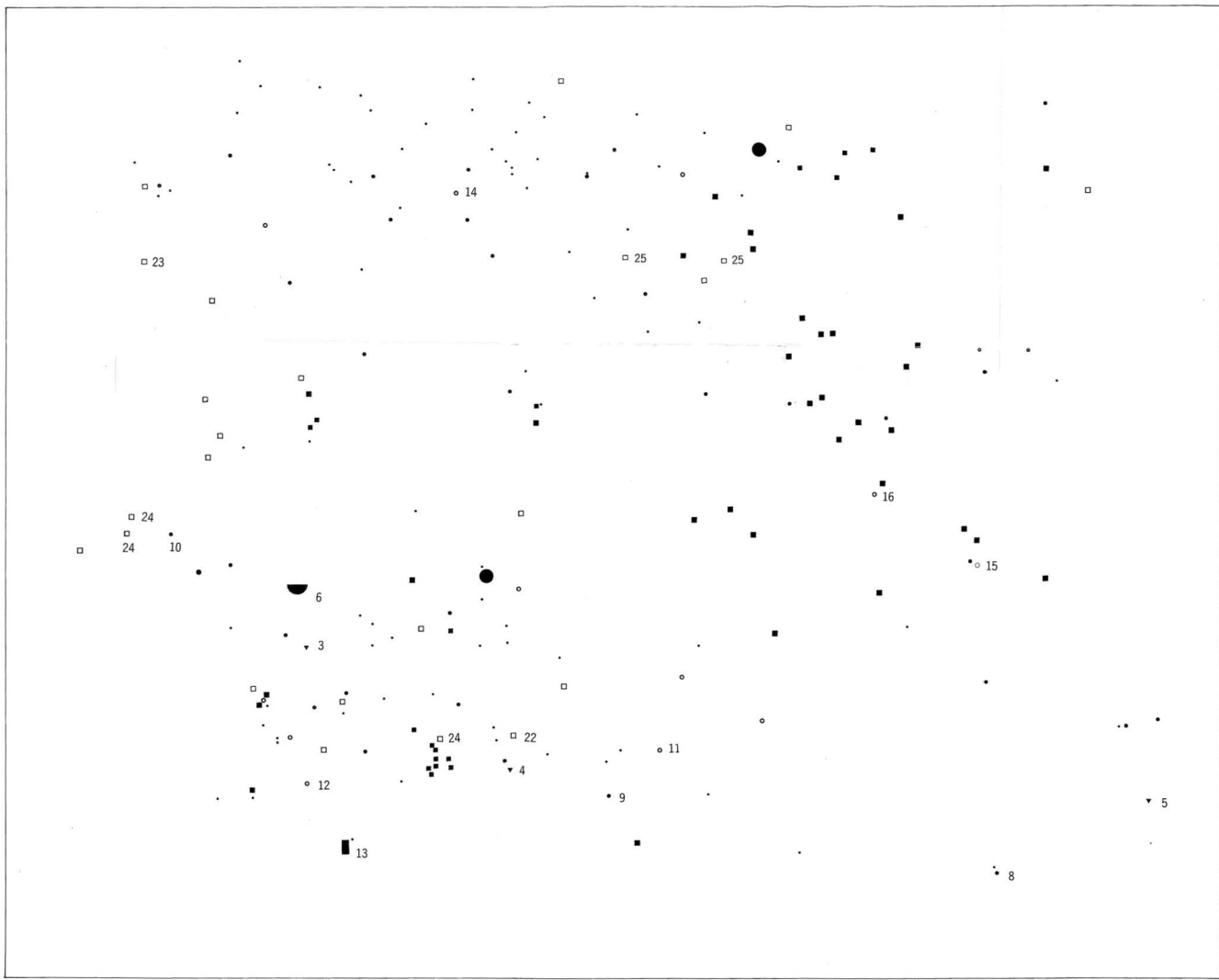


第25図 Hグリッド出土遺物実測図

第1調査区

石器類

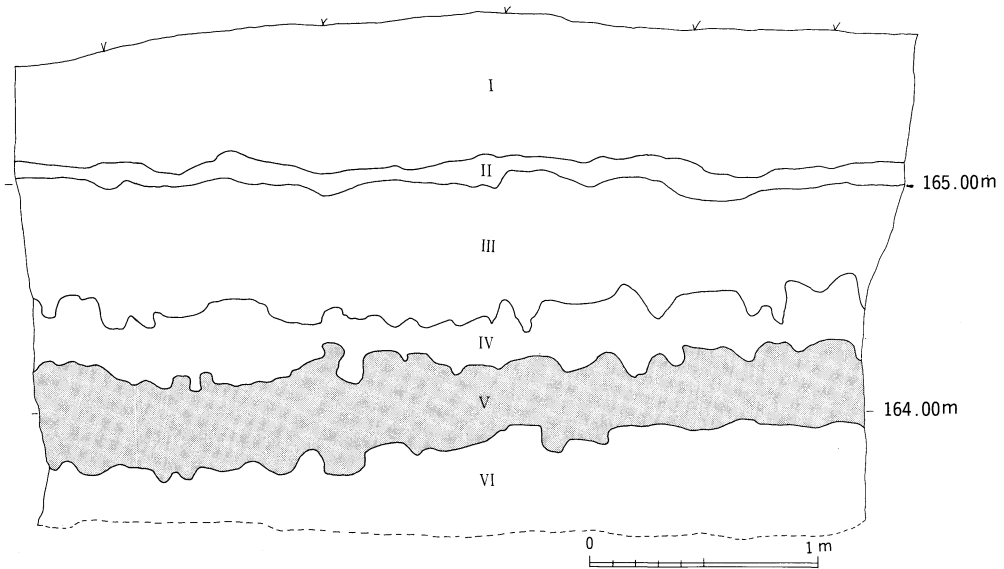
1. やや厚手の剥片を素材とした角錐状石器である。調整は素材剥片の裏面側からa面の右側辺全面および左側辺下端部、さらに稜上から施されており、断面が三角形になるように作出されている。b面下端部に面的な調整が施されており、先端部は欠損している。安山岩製。この遺物は、表土を取り除く際出土したものである。
2. 単剥離打面の細石刃で、下端部は折断により除去されている。表面右側辺に使用痕が認められる。黒曜石製。この遺物は、表土を取り除く際出土したものである。



- 凡例
- ▲ 角錐状石器
 - ▼ 細石刃
 - ◐ 細石核
 - 使用痕剥片
 - 二次加工剥片
 - 剥片
 - ・ 碎片
 - 斧形石器
 - 礫・礫片
 - 土器
 - 台石



第26図 第1調査区 (Fグリッドを含む) 遺物平面垂直分布図



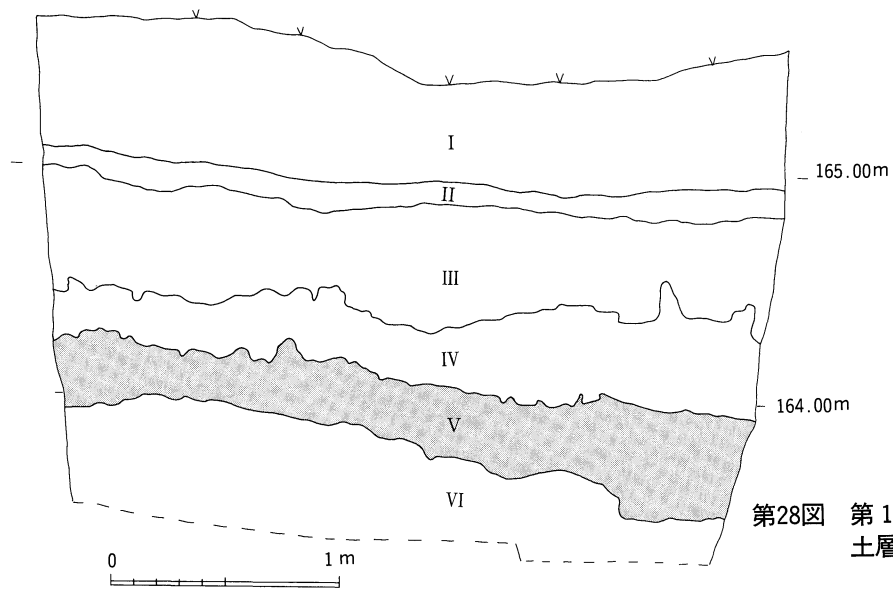
第27図 第1調査区東壁土層断面実測図

3. 単剝離打面を有し、頭部調整が認められる細石刃で、下端部は折断により除去されている。両側辺には刃こぼれ状の使用痕が認められる。流紋岩製。II層出土。
4. 単剝離打面の比較的幅広の細石刃である。下端部は折断により除去されている。使用痕は認められない。流紋岩製。II層出土。
5. 単剝離打面の細石刃である。下端部は折断により除去されている。表面の左側辺に使用痕が認められる。流紋岩製。II層出土。
6. 礫面を打面とし、厚みのある分割剝片を素材とした細石核である。分割礫の平坦面(e面)を打面として、両側面に調整を施している。下端部からの調整も施され、形状が舟底のように整形されている。分割礫の平坦面の端部を細石刃獲得のための作業面(c面)に設定し、数枚の細石刃を剝離している。作業面左側辺下端部の剝離面の切り合い関係の観察によって、下端部からの調整がアクシデントにより作業面にまでおよんだため、遺棄されたものと考えられる。流紋岩製。II層出土。
7. 不定形剝片を用いた使用痕剝片である。使用痕は表面右側辺下端部に認められる。表面の右下に礫面を残している。安山岩製。この遺物は、表土を取り除く際出土したものである。
8. 平坦打面を有したやや幅広な剝片である。表面には打面側からの剝離痕が残っているが、風化が著しい。黒曜石製。II層出土。

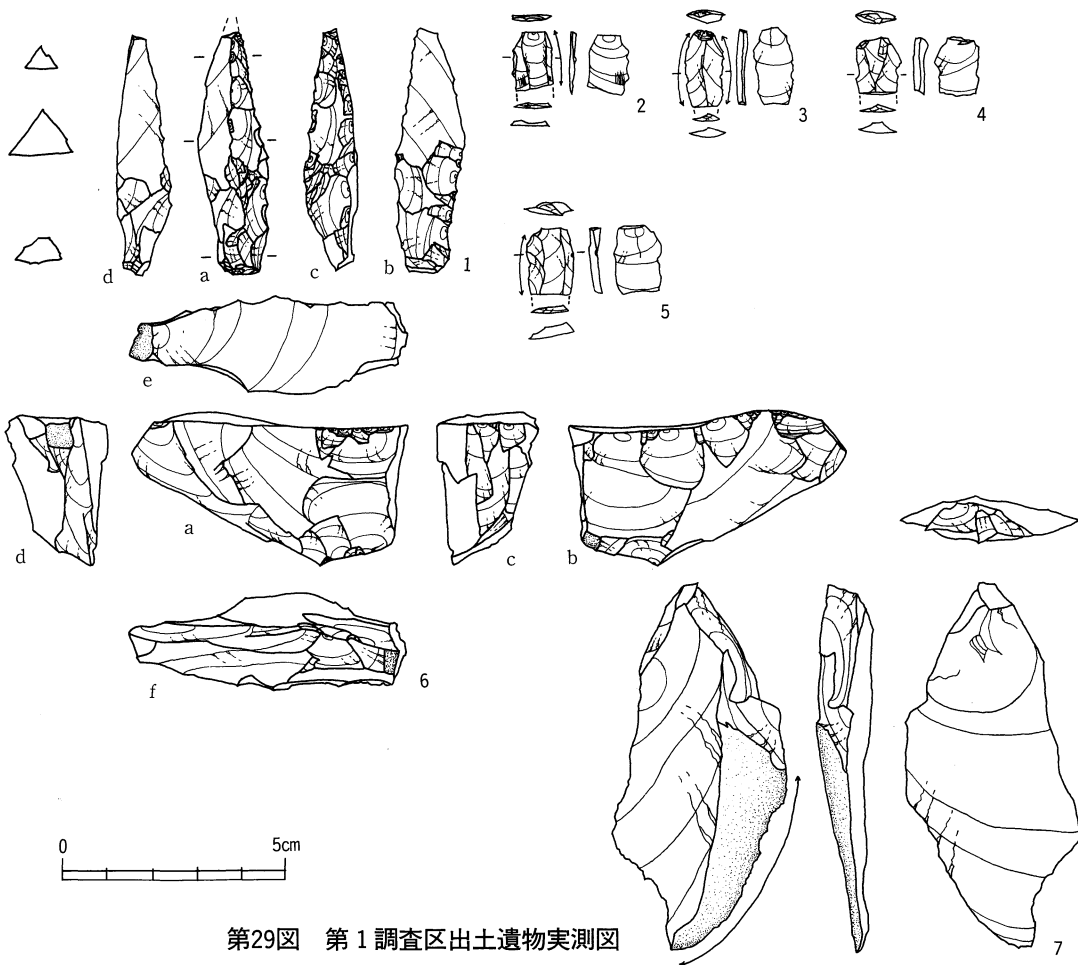
9. やや厚みのある剥片で、下端部には裏面からの剝離痕が認められる。風化が著しい。黒曜石製。Ⅲ層出土。
10. 平坦打面を有する大型の剥片で、表面の剝離面構成から打角補正を目的とした作業面再生剥片と考えられる。表面左側辺から下端部にかけて礫面を残す。流紋岩製。Ⅲ層出土。
11. 不定形な剥片を用いた使用痕剥片である。表面右側辺には刃こぼれ状の使用痕が認められる。流紋岩製。Ⅳ層出土。
12. 大型で厚みのある剥片で、表面右側辺に刃こぼれ状の使用痕が認められる。単設打面を有する石核から剝離された剥片を素材としており、左側辺に沿って礫面を残す。流紋岩製。Ⅳ層出土。
13. 扁平な礫を素材とした斧形石器と考えられる石器である。表面右側からの大まかな剝離により、形を整えたものと考えられるが、上部が欠損しているため正確な形状は不明である。また全辺にわたって微細な剝離痕が認められるが、これらは整形によるものか使用によるものか判断しがたい。結晶片岩製。Ⅳ層出土。
14. 調整打面を有する使用痕剥片である。使用痕は表面右側辺に認められる。単設打面を有する石核から剝離された縦長剥片を素材としている。表面左側下端部には裏面からの剝離痕が認められるが、二次加工を目的としたものであるかどうか不明である。先端部は欠損している。流紋岩製。Ⅳ層出土。
15. 二次加工剥片である。裏面下端部に加工が認められ、打面転移を行う石核から剝離された剥片を素材としている。両側縁ともに折断により除去されている。流紋岩製。Ⅵ層出土。
16. 幅広で厚みのある剥片を用いた使用痕剥片である。表面左側辺に刃こぼれ状の使用痕が認められ、表面右側下端部に礫面を残している。打面の左側には表面からの剝離痕が認められるが、加工を目的としたものかどうか不明である。流紋岩製。Ⅵ層出土。

土 器

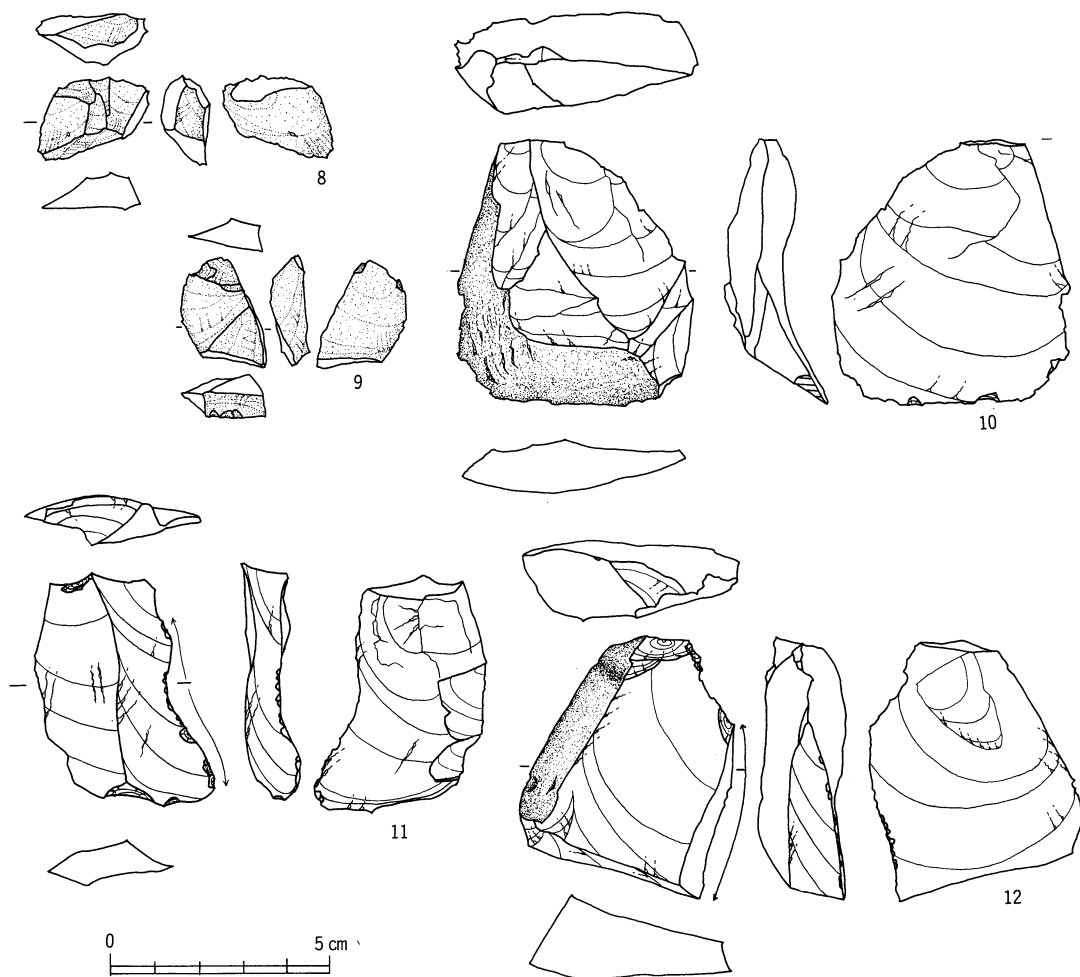
17. 押型文土器の口縁部付近である。外面には楕円押型文を横位に施文し、また内面上部にも外面と同じく楕円押型文を横位に施している。Ⅰ層出土。
18. 押型文土器の口縁部付近である。外面にはやや粗大な楕円押型文を斜位施文し、また内面には原体条痕を施しているがその直下に押型文はみられず、ナデ調整が行われている。Ⅰ層出土。
19. 湾曲部を有する胴部片で、外面にはやや粗大な楕円押型文を斜走施文している。Ⅰ層出土。
20. 無文土器の口縁部であり、色調は内外面とも赤褐色を呈する。Ⅰ層出土。
21. 13mm程の厚い器壁をもつ胴部片で条痕を横位に施している。植物の作用によるものと考えられる「L」字状の圧痕が認められる。Ⅰ層出土。



第28図 第1調査区南壁
土層断面実測図



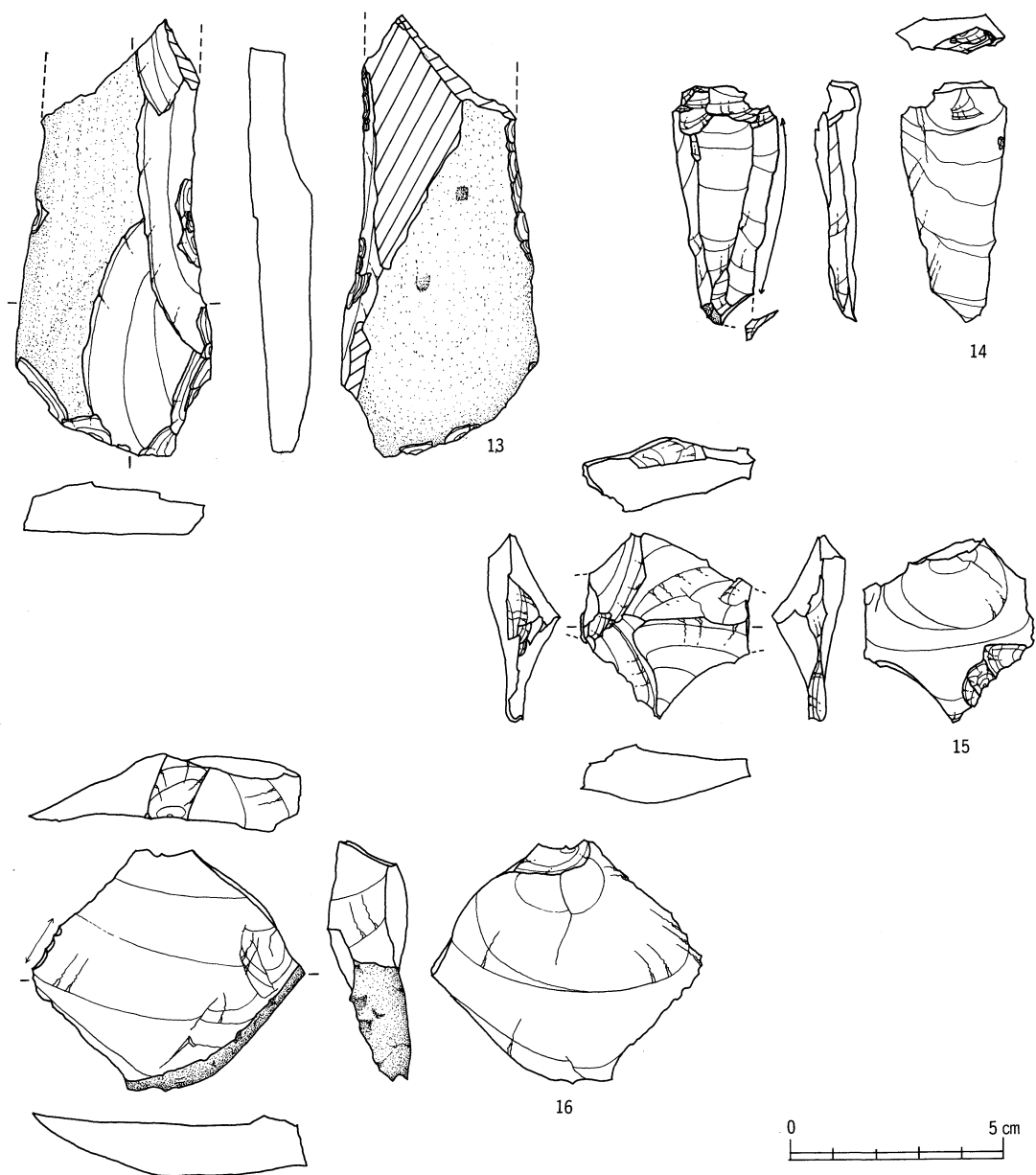
第29図 第1調査区出土遺物実測図



第30図 第1調査区出土遺物実測図

他にI層中からは、楕円押型文土器5点と無文土器17点が出土しており、楕円押型文には、斜位施文と横位施文の2種が認められる。無文土器は他のグリッドのものとは異なり、器壁が薄く胎土が緻密な一群が大部分を占める。

22. 押型文土器の口縁部である。外面は、口縁上端部にわずかに無文帯をもうけ、その下位に山形押型文を横位に施文している。内面は原体条痕を口唇部上端から垂直に施し、さらにその直下には、山形押型文を横位に施文している。また内面の施文順序としては、原体条痕間の盛り上がり山形押型文の痕跡がみられることから、押型文を施文した後に原体条痕を施したと考えられる。II層出土。
23. 外面にやや間延びした山形押型文を、中央部を境として2回に分けて縦方向に施文している。内面にはナデ調整がみられる。II層出土。

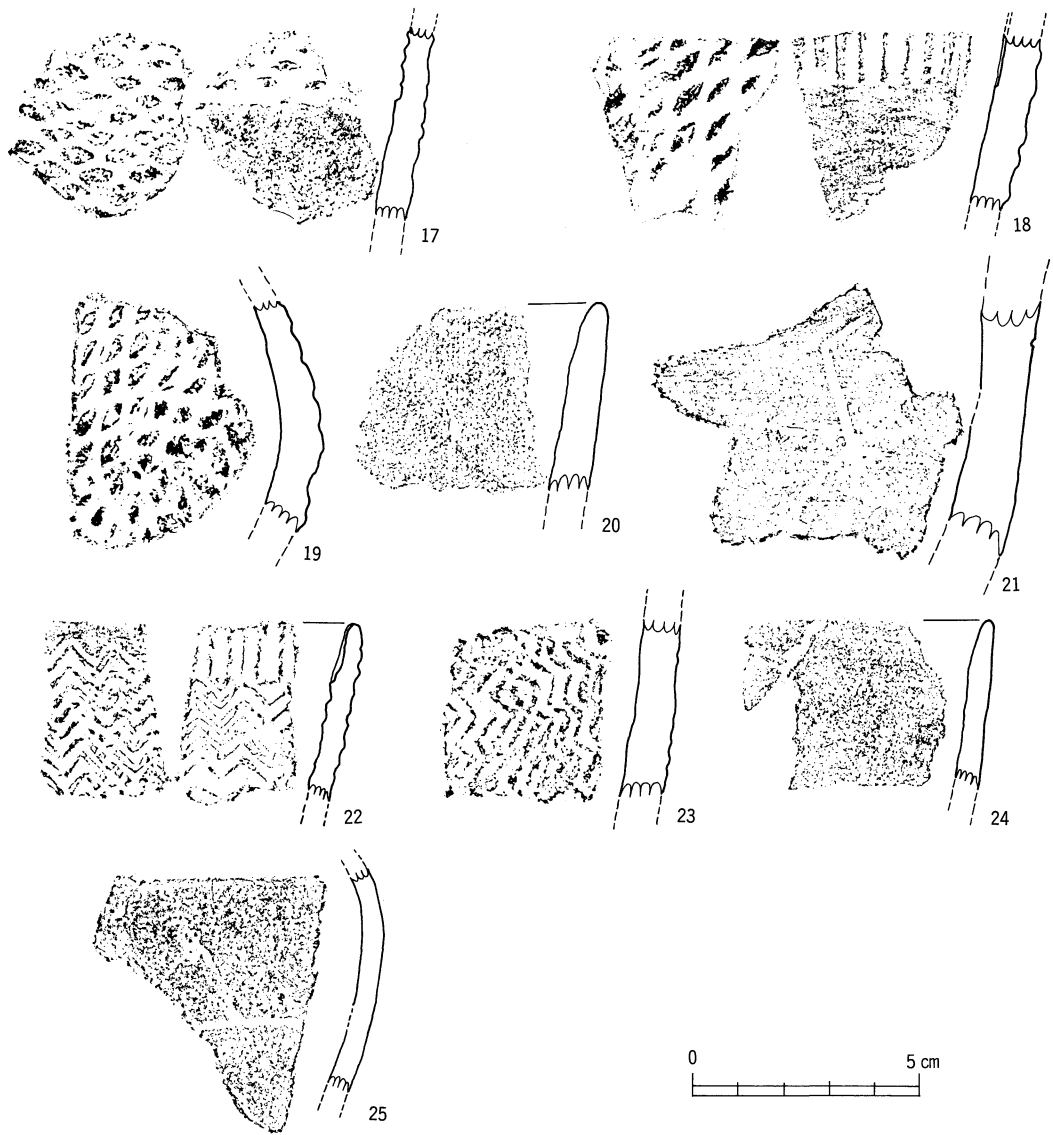


第31図 第1調査区出土遺物実測図

24. 無文土器の口縁部である。内外面とも横方向にナデ調整が行われ、器壁は5mm程度と薄く、色調は赤褐色を呈している。II層出土。

25. 緩やかな湾曲部を有する無文土器の胴部片で、器壁は5mm程度と薄く、色調は黄褐色を呈している。II層出土。

その他、II層中からは押型文土器3点と無文土器が11点出土しているが、いずれもI層出

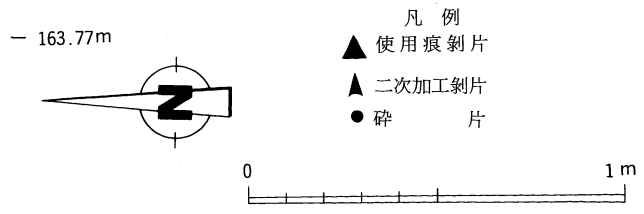
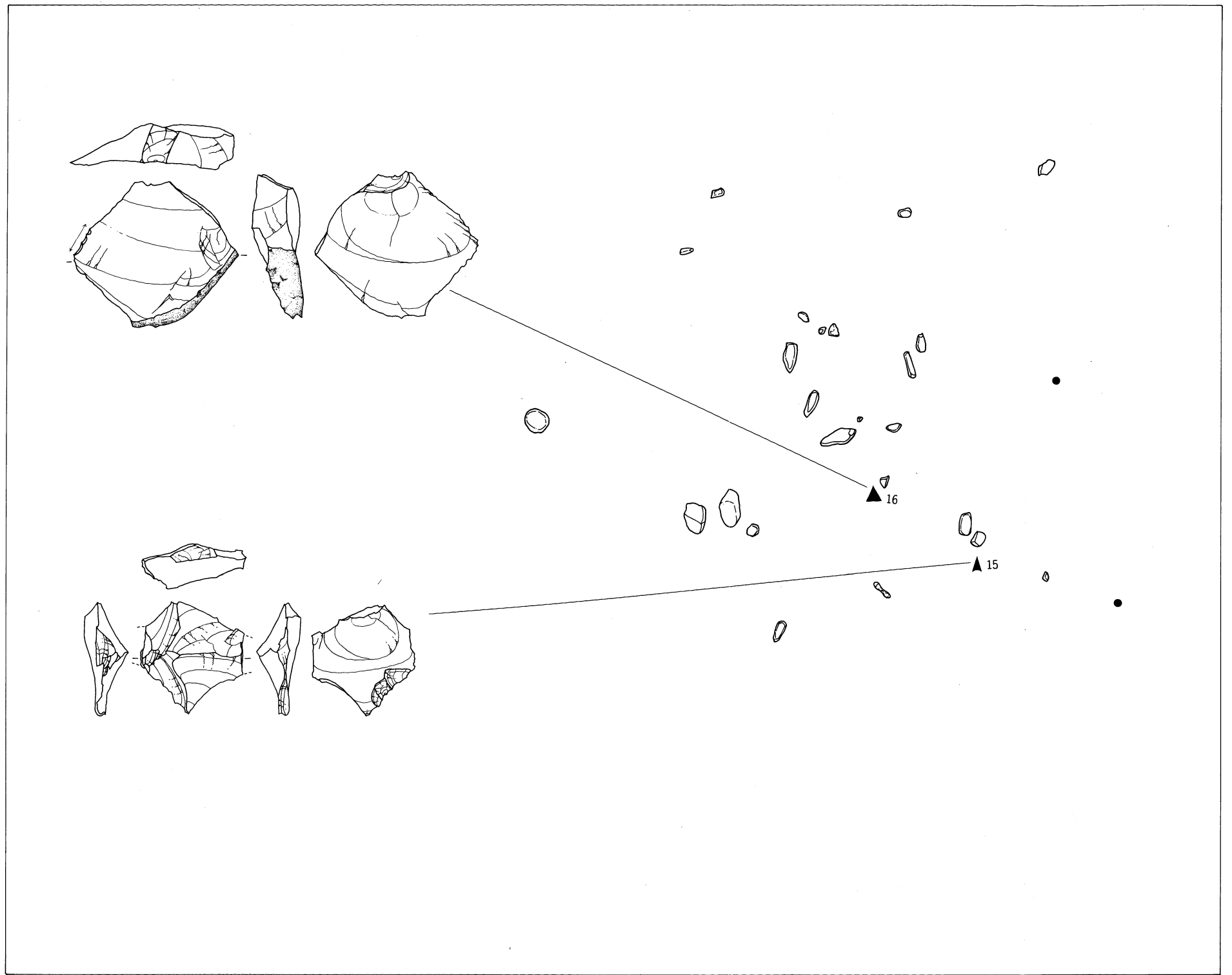


第32図 第1調査区出土遺物拓影

土の土器と類似した特徴を示す。

6 表面採集の資料

表-1 剥片尖頭器である。単設打面を有する石核から剥離された縦長剥片を素材剥片とし、素材の末端部を先端に設定している。剥片の原形を保持し、打面両端にノッチ状の加工が裏面側から施されているが、打面の一部は残されている。先端部にも裏面側からの加工が施されて



第33图 第1調査区VI層礫群・遺物平面垂直分布図

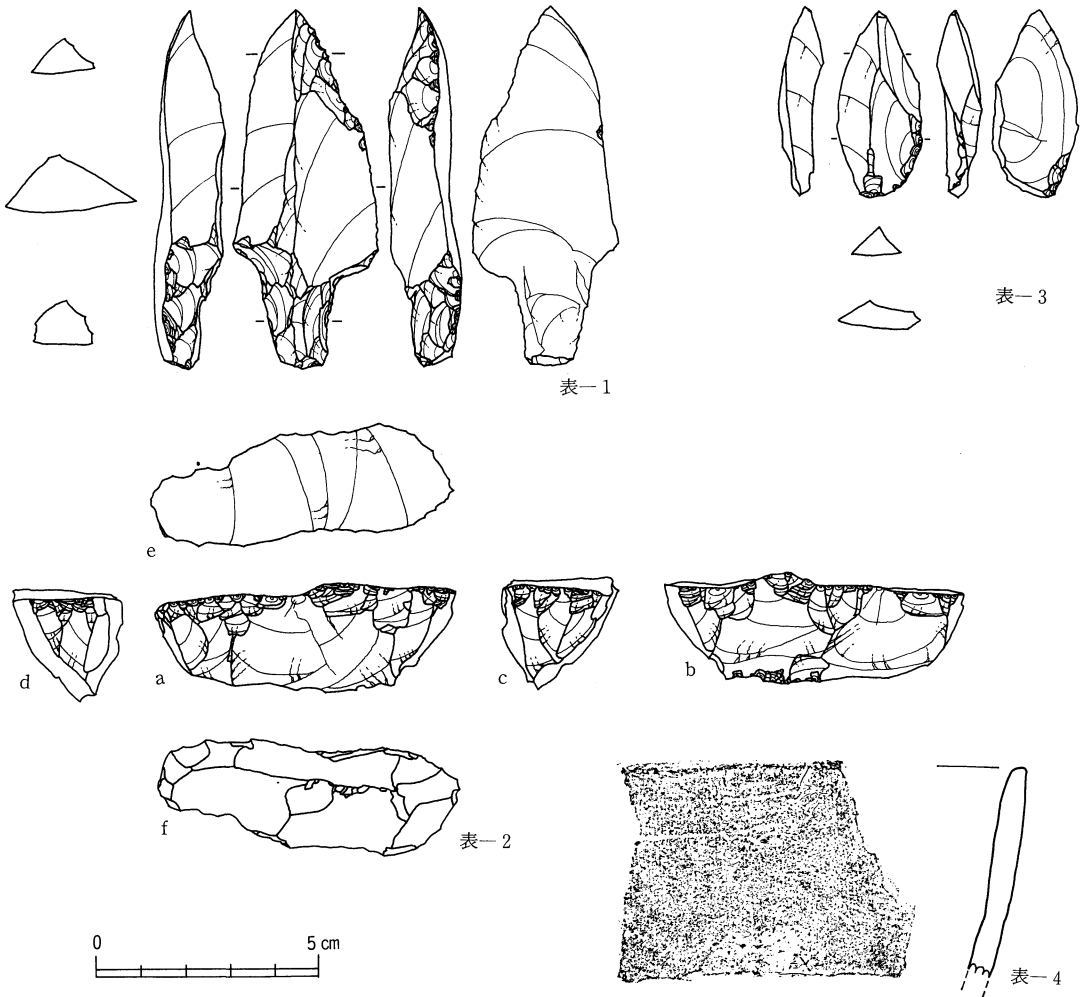
— 27 · 28 —

いる。流紋岩製。

表一 2 厚みのある剥片を素材とした細石核ブランクである。素材剥片の主要剥離面(e面)を打面に設定して両側面に調整を施しており、さらに下縁からの調整も認められる。細石刃剥離作業面は認められない。流紋岩製。

表一 3 ナイフ形石器である。表面の剥離面構成から横長剥片を剥離した後、打面を山形状に整形し、連続的に横長剥片を剥離して素材剥片を獲得している。表面右下端部に打面側から調整を施している。素材の用い方および調整の施し方から、瀬戸内系のナイフ形石器であると考えられる。流紋岩製。

表一 4 無文土器の口縁部であり、内外面とも横位に丁寧なナデ調整が認められる。器壁は5mm程度と薄く、色調は黄褐色を呈している。遺跡南側の崖面(II層相当)から採集された。



第34図 牟礼越遺跡周辺表面採集資料実測図・拓影

7 VI層出土の礫群

礫群は調査区の南側に点在しており、拳大から掌大の礫が24点出土した。礫は加熱による破損および赤化現象や、炭化物の付着ならびに敲打痕などは認められなかった。また皿状土壌や基底部の施設等は皆無であった。出土層位はVI層上部であり、共伴する遺物として使用痕剥片・二次加工剥片がそれぞれ1点、破片が2点である。

8 ま と め

今回の牟礼越遺跡の調査は、狭い台地上に第1次調査で5箇所、第2次調査で4箇所の試掘グリッドを設定し、旧石器時代石器群の文化層ならびにその広がり把握を目的で行った。さらに第3次調査においてはFグリッドを拡張し第1調査区として、黒褐色土層（ブラック・バンド）下位の明黄褐色土層の礫群および石器群の検出につとめた。

結局、牟礼越遺跡の三回の発掘調査で出土した石器類は、第1次で79点、第2次で26点、第3次で165点である。それも大多数は剥片・破片類で占められており、定型的な石器として細石刃6点、ナイフ形石器3点、角錐状石器2点それに採集資料として剥片尖頭器1点とその数は極めて限られており、それぞれの石器の形態的・技術的特徴を抽出することは困難に思える。それ以外の石器類も含めて今回の発掘では地点や層位などの出土状況の把握も必ずしも満足すべきものではなかった。

実際、細石刃とナイフ形石器との共伴関係をいかに考えるかということは別にして、ナイフ形石器、角錐状石器、剥片尖頭器が同一時期の所産として把握できるかどうかについても、地点および層位からのアプローチはできない。ただ、これらの石器が当遺跡でも、また他の遺跡でもATより上位に文化層が存在することは確かである。

そこで大野川中流域でATより上位に文化層が認められ、しかもナイフ形石器、角錐状石器、剥片尖頭器の三器種あるいは二器種が出土している遺跡の代表的なものとして、岩戸I文化、岩戸D文化、百枝（C地区）第II文化などをあげることができよう。

これらの遺跡でナイフ形石器、角錐状石器、剥片尖頭器の三器種が出土しているのは百枝第II文化のみである。この文化層のナイフ形石器は縦長あるいは斜め方向の剥片を素材に用いて、二側辺あるいは一側辺に加工を施したもの、あるいは部分加工のものなどバリエーションに富んでいる。角錐状石器も断面が台形あるいは三角形で、調整が三面全体におよぶもの、二面のもの、さらに周辺部に集中するものなど多彩である。剥片尖頭器は1点のみであるが、縦長剥片を素材に打面の両側辺と先端部の一側辺に調整を施した典型的なものである。

牟礼越遺跡では、これらの資料と比較できるほどのものは出土していないが、DグリッドIII層出土の薄手の縦長剥片を素材にして周辺部のみに調整を施した特徴的な角錐状石器は、百枝第II文化に極めて類似したのを見つけることができる。また、岩戸I文化の槍先形尖頭器の中に両側辺に沿ってのみ集中的に調整を施し、打面と反対の一端を尖頭状に尖らせたものが見られる。もう1点の角錐状石器は第1調査区の表土層から出土しているが、先のととは対照的に横剥ぎの厚めの剥片で、しかも断面三角形の一面に集中的に調整が施され、さらに主要剥離面の基部側にも平坦な剥離が行われている。

剥片尖頭器は百枝第II文化と岩戸D文化に各1点出土しているが、牟礼越遺跡採集の剥片尖頭器は岩戸D文化のそれに、より類似していると言えよう。

いずれにせよ、当遺跡の定型的な石器の数が極めて少なく、その上出土状況も単一のものと確証はないため、形態的・技術的に類似した資料が存在していると言う程度である。

層位的には明確にできなかったが、ナイフ形石器、角錐状石器、剥片尖頭器などの石器とは異なる時期と考えられる特徴的な石器類として、細石刃6点、細石核1点、それに採集資料として細石核ブランク1点がある。細石核はいずれも分割礫（分割剥片）を素材にして、分割面を打面ないし側面に利用している。側面調整は打面側から主として行われているが、逆方向からも施されており、全体の形態は舟底状を呈する。細石刃剥離作業面は小口（短辺）の一端に設定されており、打面調整は見られない。これらの形態的・技術的特徴は東九州の細石器文化で普遍的に認められる「船野型細石核」そのものである。ただ、素材に分割礫（分割剥片）の平坦な面を打面ないし側面に利用している点などでは、船野型細石核のバリエーションで「上下田型」とすべきかも知れない。東九州地域の細石器文化にあって、上下田型は船野型細石核よりも時間的に後出する傾向が推測されているが、この遺跡ではそのことを積極的に示唆する石器類や層位的根拠は見当たらない。この牟礼越遺跡で1万数千年前の細石器文化の人々の何らかの営みがあったことが、しかもそれらが大野川流域の他の細石器文化と同様な石器製作技術を有していたことは確かなことと言えよう。

第1調査区IV層から斧形石器と考えられる結晶片岩製の石器が1点出土している。ハードローム層中出土や自然面・節理面を多く残していること、さらに一部が欠損しており全体の形態が不明であることなどで問題が残されるであろう。東九州でこのような斧形石器の出土例を知らないが、岡山県早風A遺跡出土の結晶片岩製の斧形石器に比較的類似していると考えられ、時期の問題はあるが斧形石器として認定しておきたい。

九州においては旧石器時代の斧形石器（石斧）は打製・刃部磨製共にその類例が極めて乏しい。AT降灰以前のナイフ形石器文化の古い時期では熊本県曲野遺跡が知られており、火山灰が発達していないため層位的には把握されていないが、佐賀県馬部甚蔵山遺跡・同県枝去木中山遺跡出土の石斧を挙げることができよう。一方、土器が出現する以前の細石器文化の所産の

ものとして、大野川中流域の犬飼町市の久保遺跡で4点がまとまって出土しており、また、隣接する同時期の遺跡である松山遺跡でも欠損しているが1点出土している。

類例は少ないが、このように九州ではA T降灰以前のナイフ形石器文化と細石器文化で知られているが、その中間の時期についての資料が空白である。全国的にみても現在のところ斧形石器の出土例は、ナイフ形石器文化初期の所産に片寄っているようであるが、ハードローム層に相当する時期のものが関東地方で知られていることも考慮し、その可能性のあるものとして、当遺跡出土の石器を斧形石器としている。

第3次調査で検出したⅥ層出土の礫群は、調査区南側に点在しており、加熱による破損および炭化物の付着は肉眼的には認められなかった。これらの礫群と共に使用痕剥片・二次加工剥片がそれぞれ1点、碎片2点が出土しており、また第2次調査Hグリッドでは、同一層から風化した剥片が2点および碎片が1点出土している。

大野川流域における旧石器時代の遺跡から出土した礫群をみると、代表的な遺跡として岩戸遺跡および百枝遺跡が挙げられる。岩戸遺跡の礫群は、第1次調査において第1地点の第Ⅱ層から出土している。大野川流域の基本層序で、第Ⅱ層はA T降灰後にあたるものと考えられる。一方、百枝遺跡の礫群は、第3次調査のC地区から第Ⅳ層直下および第Ⅵ層上部の2箇所から出土している。大野川流域の基本層序で、第Ⅳ層はA T降灰の頃と考えられ、さらに第Ⅵ層は、A T層下位に認められる黒色帯にあたる。当遺跡出土の礫群はⅥ層中から出土しており、黒色帯より下層の明黄褐色のローム層（Ⅵ層）にあたるので、これまでの礫群より古い時期の遺構と考えられる。

当遺跡出土の定型的な石器および剥片類から形態的・技術的な特徴を観察すると、Ⅳ層出土の剥片は、打面転移を行う石核から剥離された剥片（第25図-3）や、単設打面を有する石核から剥離された剥片（第30図-11・12 第31図-14）などである。石核（第25図-2）は、分割した平坦な面を打面として、剥片剥離作業面が固定されている。

Ⅲ層出土のナイフ形石器（第13図-2）は、単設打面を有する石核から剥離された不定形な剥片を素材として、打面側を先端に設定し、素材剥片の下端部を断ち切るようにブランディングを施している。角錐状石器（第13図-3）は、単設打面を有する石核から剥離された剥片を用いており、素材剥片の裏面から調整を施して、尖頭部を作出している。剥片では、単設打面を有する石核から剥離された剥片（第13図-4・5、第18図-1、第30図-10）、両設打面を有する石核から剥離された剥片（第7図-4）などが出土している。石核（第22図-1）は、打面と剥片剥離作業面が固定されており、頭部調整や打面調整を施さずにすぶまりの剥片を剥離している。

当遺跡が所在する大野川中流域では、基本的にソフトローム層上位から中位にかけて細石器を主体とする文化層が認められ、ソフトローム層下位からハードローム層中、さらにA Tおよ

びA Tの風化土層中にナイフ形石器の文化層が存在する。3回の試掘調査と土層断面、ならびに当遺跡周辺の表面採集遺物から文化層の検討を行ってみると、Ⅲ層のソフトローム層上位から中位にかけて細石器の文化層、Ⅲ層のソフトローム層下位からA Tの風化土を含むⅣ層のハードローム層上部に、ナイフ形石器・角錐状石器・剝片尖頭器などで構成されるナイフ形石器の文化層が予想することができる。

今回の調査で出土した土器の総数は101点を数え、その大部分が縄文時代早期に位置付けられる。101点の内訳は、押型文20点・条痕文8点・無文73点である。その多くは小破片であり、土器の断面実測図の傾きについては不確定なものも含まれる。ここでは当遺跡出土の土器について、押型文土器を中心にまとめてみたい。

押型文土器のグリッド別出土数は、Aグリッド2点・Bグリッド2点・Dグリッド1点・Eグリッド2点・第1調査区13点であり、部位別に分類すると、口縁部1点・口縁部付近3点・胴部16点となる。なお20点のうち、多数が小破片であり、同一個体と考えられるものも含まれる。押型文土器は、施文方向および文様の精粗の差から2種類あるいは3種類に分類が可能である。Ⅰ類は、横位に押型文を施文した一群であり、微細な押型文を極端に浅く施したもの(Ⅰa類)と、Ⅰa類に比べ粗大な押型文を深く施したもの(Ⅰb類)に細分できる。Ⅰa類(第7図-6・7, 第10図-4, 第13図-7・8, 第16図-1)は、A・B・D・Eの各グリッドで出土し、Ⅰb類(第10図-5, 第32図-17・22)はBグリッドで1点出土しているほかは、全て第1調査区において出土している。Ⅱ類は、やや粗大な押型文を斜位に深く施文したもの(第32図-18・19・23)であり、第1調査区のみで出土している。

東九州の押型文土器は、川原田式→稻荷山式→早水台式→下菅生B式→田村下層式→ヤトコロ式→手向山式の順に編年されているが、当遺跡出土の押型文土器をこの編年に対比させると、Ⅰ類は稻荷山式および早水台式に相当すると考えられる。しかし、Ⅰa類の中に、ナデ消しによって帯状施文を意図した可能性が指摘できる資料が含まれることは、今後の課題となるであろう。一方、Ⅰb類に分類できる土器として、第32図の22が挙げられるが、これは原体条痕の存在と併せて典型的な早水台式といえよう。またⅠb類に比べ、押型文が微細に施されたⅠa類は、より古い要素を備えていると考えられるが、口縁部の資料が欠如していることなどによって、正確な編年上の位置付けが困難である。Ⅱ類はⅠ類に後出し、型式名では下菅生B式および田村下層式に相当すると考えられる。Ⅱ類として分類されるものでは、第32図の19が田村下層式に比定されよう。また、同じく第32図の18は、口縁部の外反の具合や原体条痕の形状を正確に復元することはできないが、原体条痕下に押型文を施さないという要素から判断し、田村下層式の範疇に含めることができよう。このように当遺跡の押型文土器には、ある程度の時間幅が考えられる。

無文土器は押型文土器に比べ多量に出土しているが、その大半はやはり小破片である。これ

らの無文土器の大部分は、押型文土器に共伴するものと考えられ、2種類に大別できる。一方は器壁が10mmを超える厚手の一群であり、胎土は比較的粗い。もう一方は、器壁が5mm程度の薄手の一群であり、胎土は比較的緻密で焼成は良好である。また、器形にも第32図の20および24のようなほぼ直口する口縁部や、同図25のような緩やかな湾曲部などいくつかのバリエーションが考えられるが、それ以外の資料からは、その器形をうかがい知ることは困難である。一般的に東九州では、押型文土器出現直前に無文土器の単純期が存在し、押型文土器の出現後、次第にその占有率が低下すると考えられているが、当遺跡では資料数が少ないこともあり、押型文土器と無文土器の量的な関係の把握はできなかった。

大分県は九州各県の中でも押型文期の遺跡が多く分布することで知られている。特に別府湾北岸や野津川流域および大野川上流域では当該期の遺跡が集中しており、それらの遺跡群に基づいた集落研究もなされている。しかし、当遺跡の所在する大野川中流域の三重町では、押型文期の遺跡は調査されておらず、横田遺跡や鬼塚遺跡などわずか数遺跡から、表面採集によって終末期の押型文土器を主体とした資料が確認されたのみである。このような状況から当遺跡の資料は少数ながら貴重なものであり、今後の研究を行う上での参考となるであろう。

主要参考文献

- ・栗田勝弘・高橋信武 1984年 「新生遺跡・下藤遺跡」 『野津川流域の遺跡』 V 野津町教育委員会
- ・坂田邦洋編 1980年 『大分県岩戸遺跡』 広雅堂
- ・清水宗昭編 1985年 『百枝遺跡C地区』 三重町教育委員会
- ・芹沢長介編 1978年 『岩戸』 東北大学考古学研究室
- ・橘 昌信編 1981年 『大分県上下田遺跡』 別府大学付属博物館
- ・橘 昌信 1982年 「無文土器」『縄文文化の研究』 3 雄山閣
- ・橘 昌信編 1983年 『大分県上下田遺跡第2次発掘調査報告書』 別府大学付属博物館
- ・橘 昌信 1983年 「大野川中流域」 『大分県史先史篇』 I
- ・橘 昌信編 1985年 『駒方古屋遺跡』 別府大学付属博物館
- ・橘 昌信編 1987年 『駒方古屋遺跡第2次・第3次発掘調査報告書』 別府大学付属博物館
- ・橘 昌信編 1993年 「牟礼越遺跡の試掘調査」『別府大学付属博物館だより』 No.40
- ・町田 洋 1978年 「大野川流域の古代、人類遺物を包含する火山灰層」『クロボク』 別府大学学生考古学紀要
- ・柳田俊雄編 1986年 『岩戸遺跡』 清川村教育委員会
- ・山崎純男・平川裕介 1886年 「九州の押型文土器」 『考古学ジャーナル』 267
- ・吉留秀敏 1984年 「駒方C遺跡の調査」 『大野原の先史遺跡』 大分県教育委員会
- ・渡辺澄夫 1987年 「三重町の歴史」 『大分県三重町誌総集編』 三重町役場

お わ り に

今回の牟礼越遺跡の発掘調査では、遺跡の土地所有である都良男氏、三重町教育委員会、同教育委員会の諸岡郁氏らの協力を得た。心から感謝申し上げたい。さらに別府大学卒業生で大分県文化課勤務の牧尾義則・坂本嘉弘・綿貫俊一の各氏、日出町教育委員会勤務の高松英治氏などにもお世話をいただいた。

発掘調査および報告書の作成は下記の別府大学史学科の学生諸君の協力のもとにすすめられた。特に、山下宗親・林 潤也の両君は執筆の分担も行うなど、中心的な役割を果たしてくれた。調査・整理・報告など一連の仕事に積極的に携わったすべての学生諸君に感謝したい。なお、学生が執筆した箇所についても橘が修正・加筆を行っているので、文責は橘にある。

第1次調査参加学生

池田朋生・稲村秀介・橋本幸治・上田由香・江島伸彦・金丸武司・小谷桂太郎・山下宗親

第2次調査参加学生

上田由香・江島伸彦・小谷桂太郎・吉田和彦・井上信隆・山下宗親・橘 丈太郎

第3次調査参加学生

上田由香・小谷桂太郎・井上信隆・山下宗親・井上義也・林 潤也・遠部 慎・佐伯正憲
整理・報告書作成参加学生

井上隆文・井上信隆・山下宗親・幸しのぶ・井上義也・志賀智史・橘 丈太郎・馬場克幸
林 潤也・伊藤大介・遠部 慎・岸川秀盛・木村 剛・佐伯正憲・島内浩輔・下東嘉也
鈴鹿智幸・千歳 渉・曾根崎香織・玉井宏典・永井孝宏・福元明美・水上 仁・水口由香
牟田健二



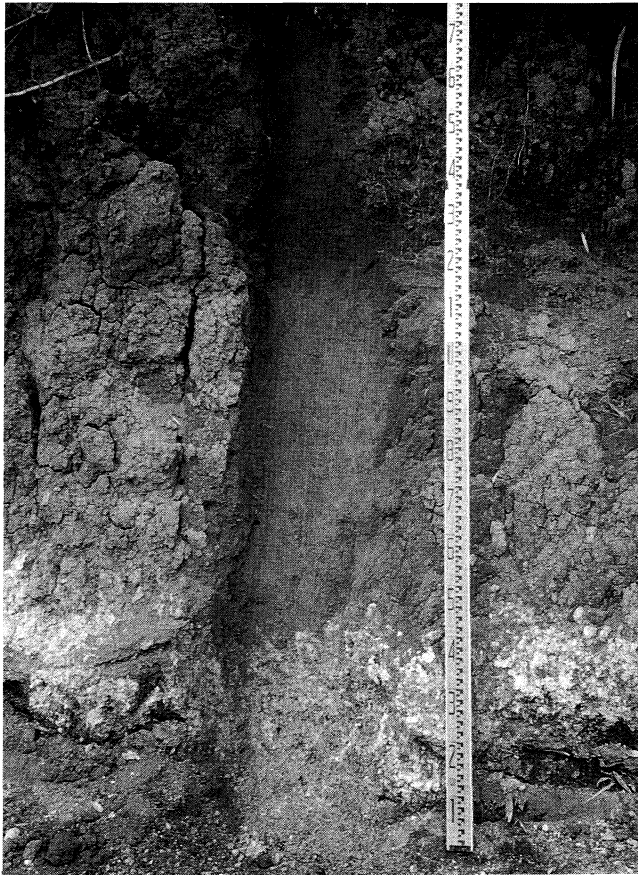
牟礼越遺跡遠景（南東より）



牟礼越遺跡近景



第1調査区南壁土層堆積



B.B
(黒色帯)

Kjp 1
(久住第1軽石層)

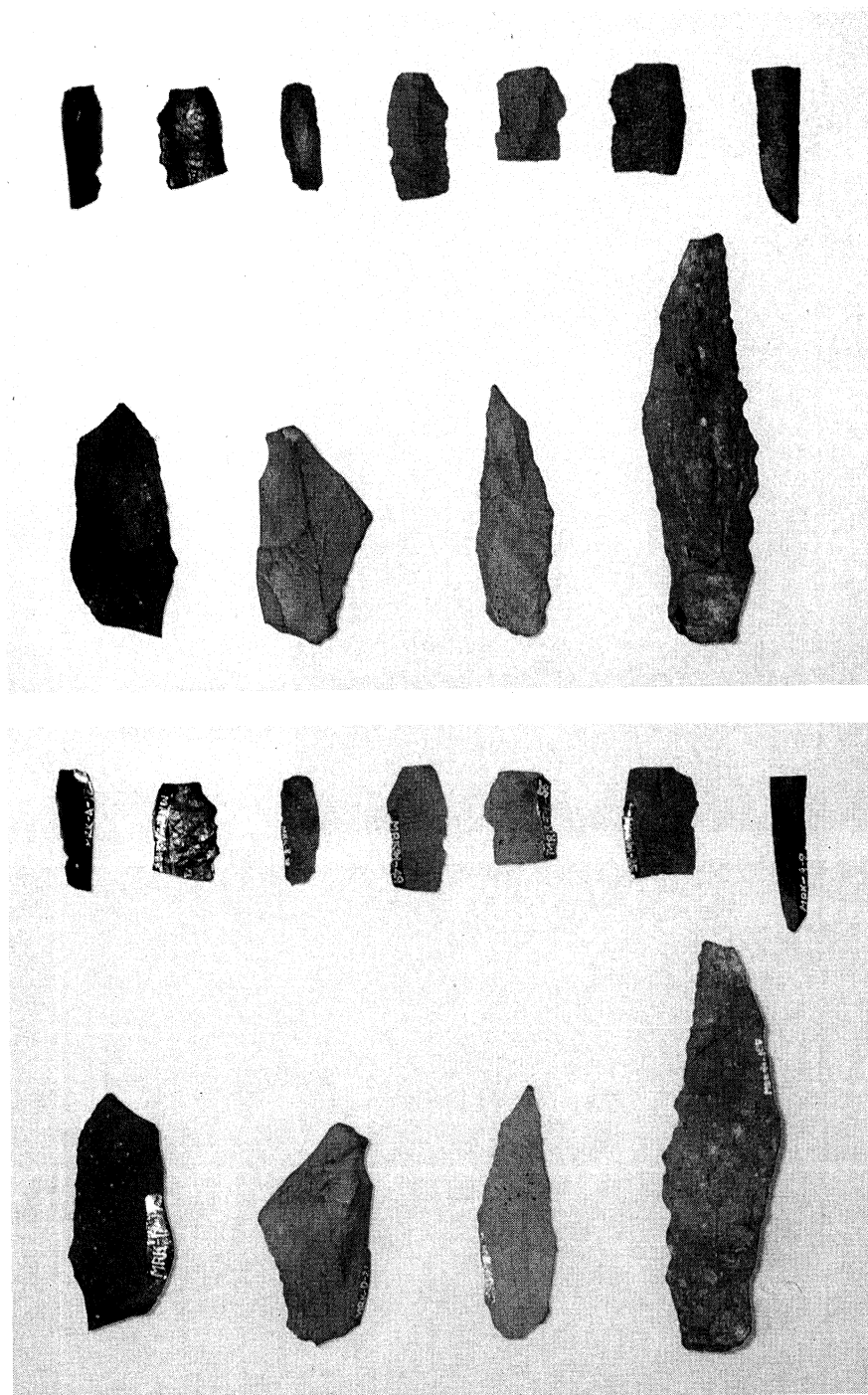
牟礼越遺跡
崖面の土層堆積



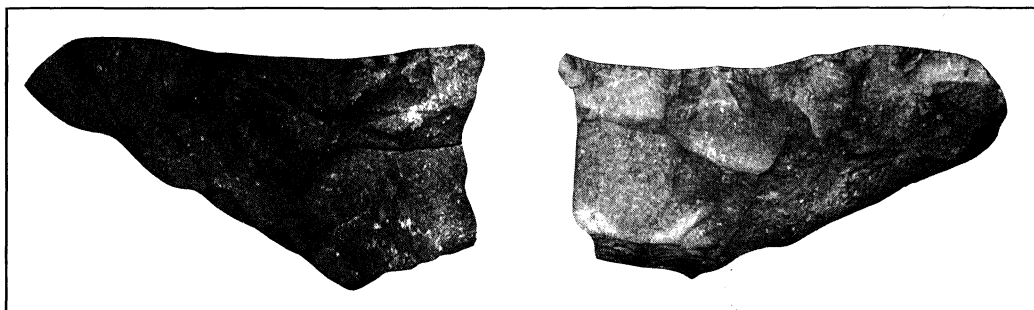
第1調査区
VI層出土の礫群

第1調査区
VI層出土の礫群と剝片





第1調査区・他の出土石器



第1調査区出土の細石核

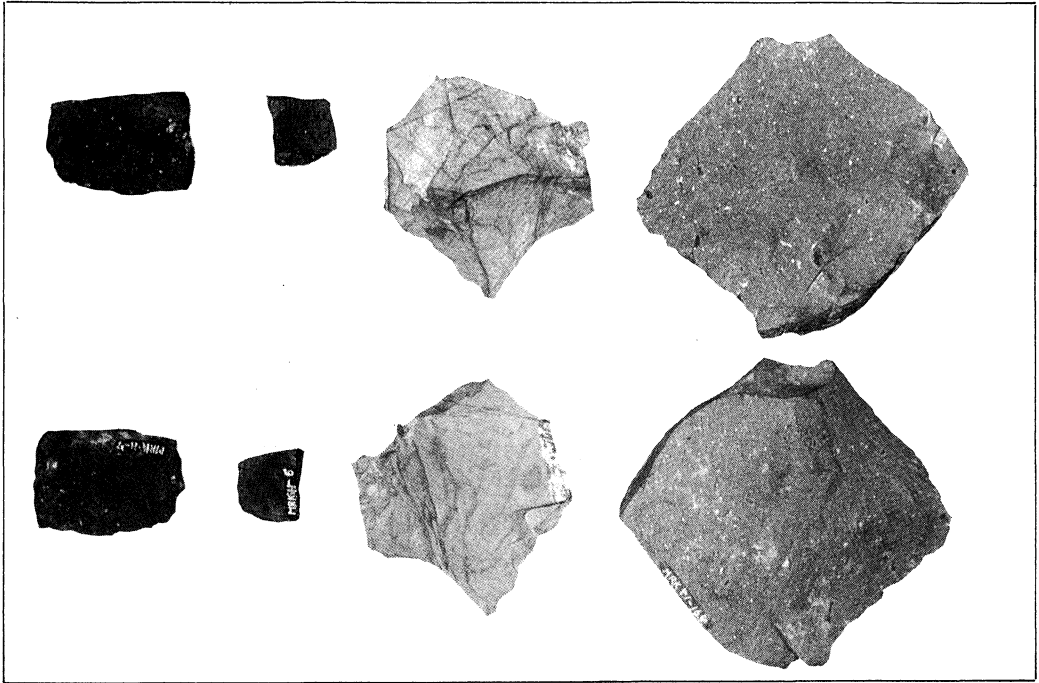


第1調査区出土の斧形石器

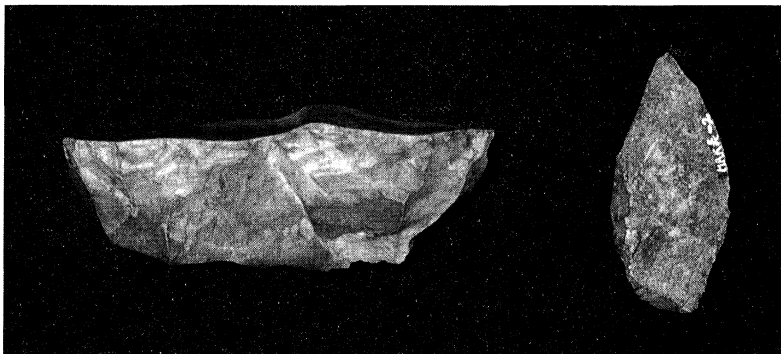
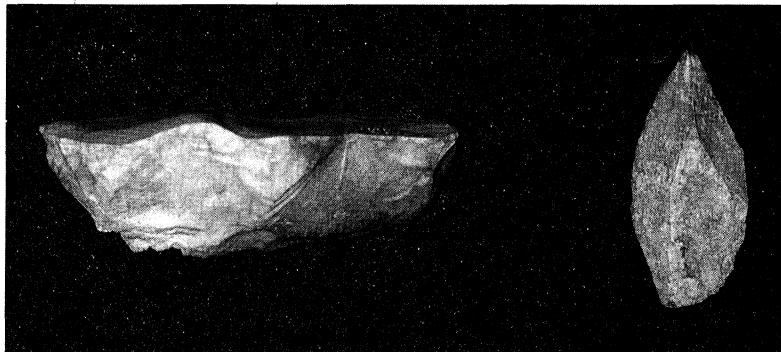


Dグリッド出土の敲石

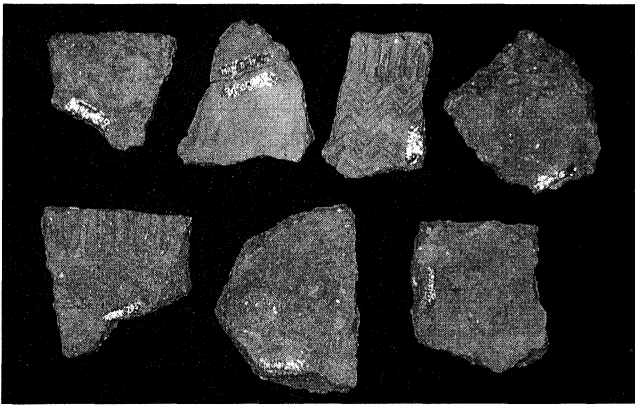
図 版 VI



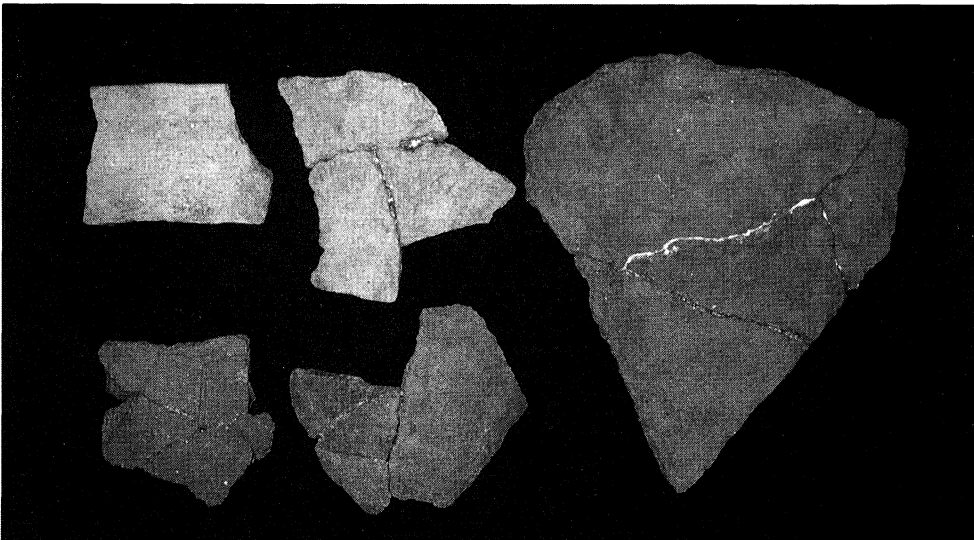
Hグリッド・第1調査区VI層出土の石器



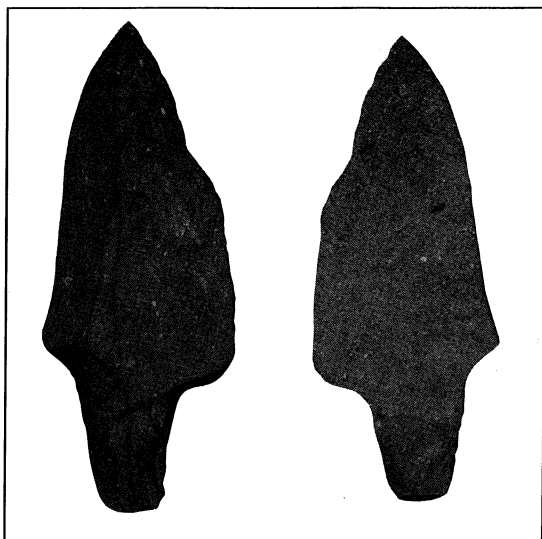
表面採集の石器



押型土器



無文土器



表面採集の剝片尖頭器



発掘調査参加学生



牟 礼 越 遺 跡

— 大野郡三重町所在の旧石器・縄文時代遺跡 —

1995年3月 印刷・発行

編 著 橘 昌 信

発行所 別府大学附属博物館
874-01 別府市北石垣82

印刷所 佐伯印刷株式会社
大分市古国府1155-1



